長野県埋蔵文化財センター年報22

2005

財団法人長野県文化振興財団
長野県埋蔵文化財センター

飯田市　竹佐中原遺跡　旧石器時代の石器出土状態

中野市　千田遺跡　縄文時代の集落

目　次

口絵写真

飯田市　竹佐中原遺跡　旧石器時代の石器出土状況

中野市　千田遺跡　縄文時代の集落

目　次

2005年度の長野県埋蔵文化財センター……1

Ⅰ　発掘作業の概要

北信

（1）千田遺跡 ……2

（2）川久保遺跡 ……4

（3）南曽峯遺跡 ……6

（4）沢田鍋土遺跡 ……7

（5）表町遺跡 ……8

（6）東條遺跡 ……10

（7）力石遺跡 ……11

東信

（8）天神城跡 ……12

（9）西一里塚遺跡 ……13

（10）森平遺跡 ……14

（11）矢出川遺跡 ……16

南信

（12）御社宮司遺跡 ……17

（13）駒形遺跡 ……18

（14）構井・阿弥陀堂遺跡 ……20

（15）東高遠武家屋敷跡 ……22

（16）箕輪遺跡 ……23

（17）辻原遺跡 ……24

（18）川路大明神原遺跡 ……25

（19）竹佐中原遺跡 ……26

Ⅱ　整理作業の概要……28

Ⅲ　普及公開活動の概要……29

Ⅳ　研修・資料調査等の概要

（1）講師招へいなどによる指導 ……30

（2）研修・視察・資料調査 ……30

（3）全国埋蔵文化財法人
連絡協議会等の参加 ……31

（4）市町村・関係機関などへの協力 ……31

（5）学校関係への協力 ……32

（6）学会・研修会などでの発表 ……32

（7）資料の貸し出し ……32

Ⅴ　組織・事業の概要

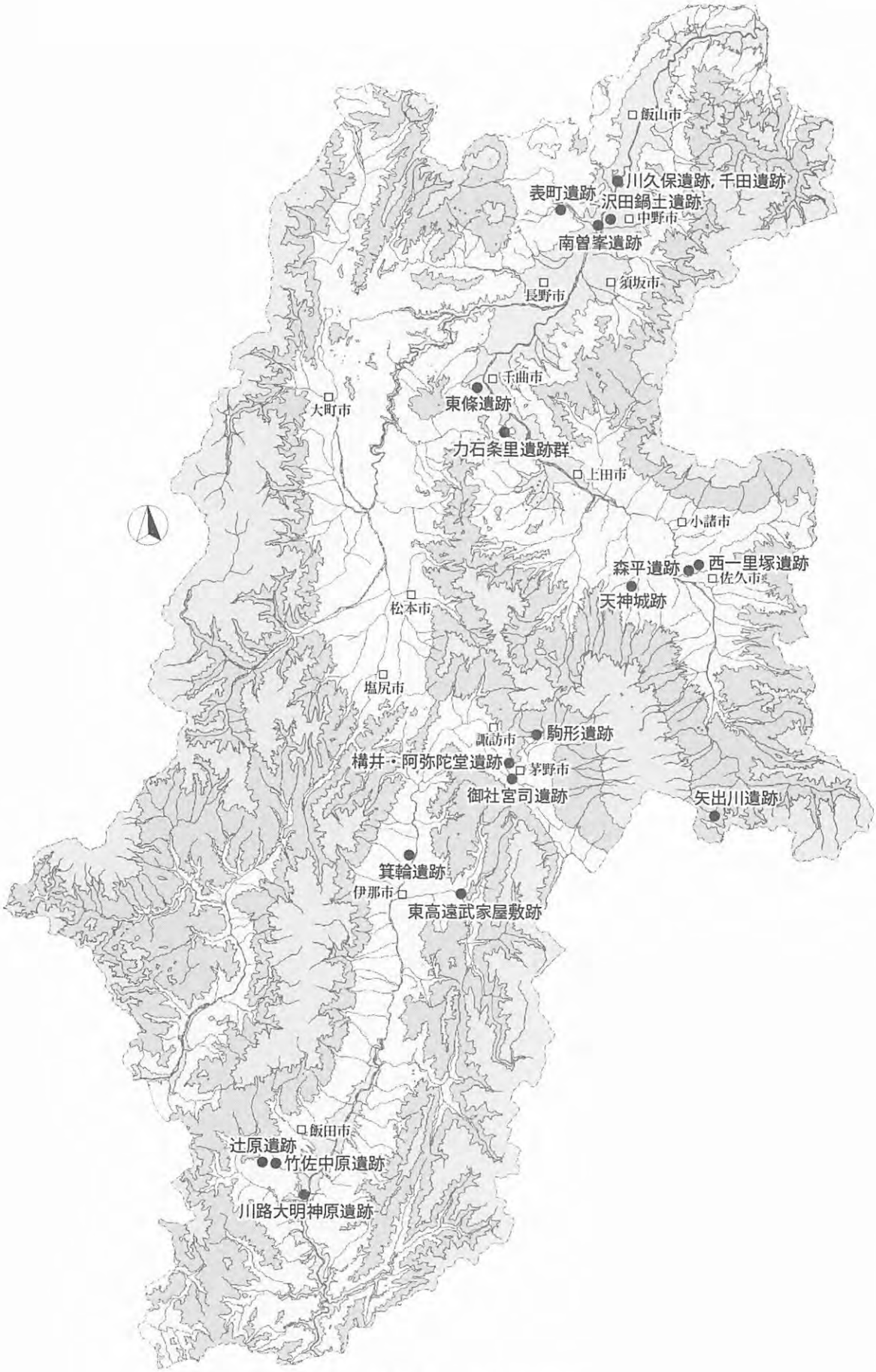
（1）事業 ……33

（2）組織 ……34

（3）職員 ……34

付編　縄文トーク……35

「八ヶ岳西麓の縄文文化をめぐって」



第１図　発掘作業した遺跡の位置

2005年度の長野県埋蔵文化財センター

2005年度長野県埋蔵文化財センターでは、14事業、19遺跡の発掘調査を実施した。中信地区での発掘調査は実施しなかったが、北信で7遺跡、東信で4遺跡、南信で8遺跡にかかわった。各遺跡の調査については、各項を見ていただき、ここでは、時代毎に本年度調査遺跡の特色を概観する。

■　旧石器時代

飯田市竹佐中原遺跡では、後期旧石器時代を遡ると考えられる石器群(C地点)を調査した。C地点の石器群は詳細において2000年発見のA地点とは違いがあり、今後の詳細な分析を通して、列島における旧石器時代の初期段階の様相に大きく貢献できると考える。**南牧村矢出川遺跡**では、後世の土地改変が激しくなされていることを確認したが、改変が及ばなかった僅かな部分から、細石刃文化より古い石器製作址を発見し、矢出川遺跡の旧石器文化について新資料の提供となった。

■　縄文時代

茅野市駒形遺跡では、昨年調査できなかった道路下部分から、前期初頭の住居址と方形柱穴列が激しく切り合う状態で発見された。さらに、取り付け道路部分の調査から、前期初頭集落の北・東・南側の境をほぼ明らかにできた。千曲川の流れに面する台地上に立地する**中野市千田遺跡**では、中期中葉から営みが開始され、後葉、末葉へと継続する中期の大集落を調査した。竪穴住居は環状に配されており、この地域一帯で中核をなす集落であることは間違いないといえる。さらに、発見された遺構・遺物は新潟県上越地方に共通しており、北信濃の中期文化を考えていく上で欠くことのできない遺跡である。

■　弥生時代

佐久市湯川沿いの低い河岸段丘上で新たに発見された**森平遺跡**からは、意図的に焼却されたと考えられる弥生時代中期後半の集落を発見した。一部はすでに工事によって破壊されており、遺跡の存否について一層きめ細かく調査していく必要のあることを教えられた。**佐久市西一里塚遺跡**では、通称「流れ山」の頂部から複数の住居址が発見されたり、現景観上平坦な台地の地下に低地が検出されたり、台地と低地の境では掘削された溝が発見されたりし、佐久地方の弥生文化について新たな資料が提供された。

■　古墳時代

斑尾川左岸に立地する**中野市川久保遺跡**では、現地表下2mほどから、後期の集落の一角が発見された。千曲川、斑尾川の洪水を被る環境であり、古代人がこの地を選択している事情を明らかにしていくことで、千曲川と遺跡立地の関係についての新知見が増えると考える。

■古代

茅野市構井・阿弥陀堂遺跡では平安時代の集落の一角を発見した。調査範囲の周辺に広がる状況で住居址は分布しており、一帯に大きな集落が存在したことは確実である

■　中・近世

飯綱町表町遺跡からは、矢筒城の南に広がる台地上で、掘立柱建物と井戸が発見された。15基を数える井戸の中からは農具、木臼、曲げ物などが出土した。また、**千曲市東條遺跡**からも、石組みの井戸が発見され、朱漆で草木を描いた黒漆皿や箸、下駄などが出土した。いずれも当時の生活状況を復元する上で好資料となる。

高遠町東高遠武家屋敷遺跡では、県宝「馬島家」の庭が作り変えられてきた状況を、現存する写真資料とも見比べて調査を実施した。本センターとしては珍しい調査となった。

■　公開・普及

報告書にまとめた聖石・長峯遺跡についての報告会を行い、併せて八ヶ岳山麓の縄文文化を考えあうシンポジウムを実施した。また、社宮司遺跡出土の六角木幢や竹佐中原遺跡の旧石器文化についても、多くの市民の方の参加のもと、それぞれの特徴や歴史的意義を深める報告会とシンポジウムを開催した。

（調査部長　市澤　英利）

Ⅰ　発掘作業の概要

（1）千田遺跡（千曲川替佐築堤関連）

所在地及び交通案内：中野市大字豊津字千田
上信越自動車道信州中野ICより北へ4km
JR飯山線替佐駅より南東へ直線距離0.3km
遺跡の立地環境：蛇行する千曲川左岸の川岸

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.4.18～12.22	12,720㎡	綿田弘実　柳沢　亮 久保光男　入沢昌基 河西克造

検出遺構

種　類	数	時　期
竪穴住居跡	64	縄文中期53、弥生後期8、古墳後期3
掘立柱建物跡	2	古墳後期1、中世1

出土遺物

種　類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文前・中期（多量）、弥生後期、古墳後期、中・近世（少量）
石　器	縄文磨石、くぼみ石類（多量）
土製品	縄文土偶、耳飾り、牙形垂飾り
石製品	縄文石棒、滑石製垂飾り

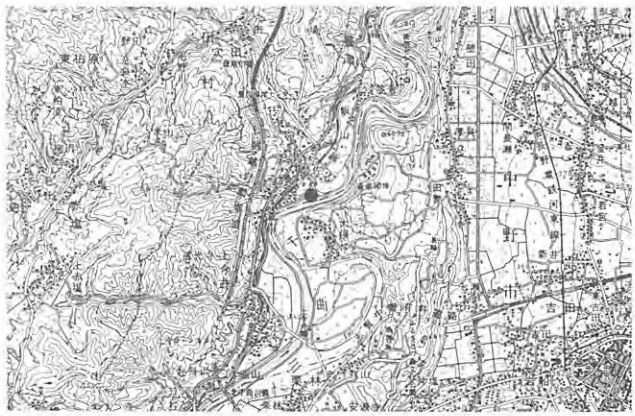
千曲川縁での縄文人のくらし

千田遺跡は千曲川左岸、標高約330m前後の地点にあり、JR飯山線替佐駅付近から千曲川までの緩斜面に広く展開する。

今年度は平成14・15年度に続く3年目の調査である。千曲川に面した7・8・9区を面的調査、斑尾川右岸の10・11・12区をトレンチ調査し、縄文・弥生・古墳時代、中・近世の遺構や遺物を発掘した。大多数は約6000㎡を占める8区に集中しているため、以下に8区を中心に、時期を追って調査の概要を記す。

縄文中期の集落　縄文前期は土器が少量出土したが、倒置埋納された可能性がある末葉の土器以外、遺構はない。

幅約60mの調査区北側は平坦な地形で、縄文中期以降の遺構が分布する。南側は千曲川に向かって傾斜が強まり、縄文時代以外の遺構や遺物は認められない。53軒の竪穴住居はすべて中期に属す。東西を沢で画された台地上に、中央を土坑分布域として、住居群は北側に開いた弧状に分布している。住居の分布が調査区外に拡大する環状集落とすれば、南半分を調査したと推定される。東側（9区）は自然流路に浸食されたガケで、廃棄場となり、西側（7区）は水田のため掘削されている。



第2図　千田遺跡の位置（1：100,000）

集落は大木8a式期かそれをさかのぼる中期中葉に始まり、末葉近くの大木9式期に及んでいるが、8割以上は後葉の大木8b式期に営まれている。中葉の住居は5軒ほどが弧の外側に分布し、地床炉と埋甕炉を備える。後葉の住居は切り合いが著しい。円形か楕円形プランで、壁際をテラス状に高く掘り残し、周溝がめぐるものが多い。炉は石囲炉で、人頭大以下の礫を用いた長

第3図　8区西側空撮全景

第４図　ベッド状遺構を備えた住居跡

第５図　コの字形炉をもつ住居跡

方形、楕円形あるいはコの字形などの火床が浅い炉から、大形礫で囲んだ深い方形炉にうつり変わる。コの字形炉は長さ1.8mに達するものもある。末葉に近い住居は３軒が弧の内側にあり、４枚礫の石囲炉と埋甕を備え、２軒は炉の一辺に接して円礫を敷いた古手の敷石住居である。

土坑群には、柱穴状から貯蔵穴状まで規模や形態はさまざまだが、形態等から墓穴と判断できる土坑は多くない。中葉の大形土器片を、礫の間に挟んだ配石墓と思われるものが少数含まれる。平坦面の土坑分布域と、斜面に移る住居域の上層に配石遺構がみられる。前者は全体が不整形の環状にも見える。後者は長さ４ｍ以下の弧状または直線状の小規模な列石で、石皿や石棒などを含んでいる。不揃いながら、数基が等高線に沿って分布している。帰属時期と性格が課題である。

縄文中期の遺物　土器は、中・後葉とも、新潟県に主体的に分布する型式で占められる。中葉には北陸の天神山式類似の土器が多い。後葉には「栃倉式」に圧痕隆帯文土器が伴う組成となり、唐草文土器はほとんど含まれない。土器様相に呼応して長野県では埋甕の盛行期ながら、それがほとんどみられない。末葉に近くなると、千曲市屋代遺跡群と同じく関東系の土器型式に変わる。

石器は植物食料加工に関わる磨石やくぼみ石類が多く、狩猟・解体具の石鏃、掻器類は少ない。磨製石斧の数は打製石斧と大差ないが、生産の痕跡は乏しい。遺跡立地を考慮すれば、いかだや丸木舟の製作に多用したのであろうか。

土製品では土偶が現在40点以上、石製品では滑石製垂飾りと北陸的な彫刻石棒がある。

このように住居や土器様相等には新潟県と共通の地域色があり、本遺跡は上越地方と一帯の地域における拠点とみられる。また北信地方で最大級の縄文中期集落と位置づけられる。

７区では14年度調査された平坦面の後期土坑群と急斜面の中期末葉頃の廃棄場、９区では後期中葉の配石遺構と土坑を検出した。時期によって、集落内における住居等の位置が変化していることが明らかになった。

弥生時代　７区斜面で中期栗林式期の土器埋納遺構、８・９区で後期吉田式期の住居８軒を検出した。住居は隅丸長方形で、地床炉と深い柱穴を備え、多量の土器や磨製石鏃、石斧を伴うものもある。12区で同時期の集落が確認され、当該期の大規模な集落跡と推定される。

古墳時代　８区で後期の竪穴住居３軒と掘立柱建物跡１棟を検出した。大形の礫石錘を伴い、漁労活動の証拠として注目される。カマドのない住居や掘立柱建物の性格が興味深い。

中・近世　８区で掘立柱建物を含むピット群を検出した。わずかな陶器から中世の集落跡と推定される。11・12区は斑尾川へ向かって傾斜し、洪水砂に覆われた水田跡が重層的に確認された。中間に内耳土器や茶臼を伴う層があり、一時期集落が営まれた可能性がある。

（2）川久保遺跡（千曲川替佐築堤関連）

所在地及び交通案内：中野市豊津字堰添

上信越自動車道信州中野ICより北へ4km

JR飯山線替佐駅より東へ0.6km（徒歩10分）

遺跡の立地環境：斑尾川が千曲川に注ぎ込む合流地点左岸の川岸

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.4.1～12.26	9,000㎡	市川隆之　入沢昌基 山崎まゆみ

検出遺構

種　類	数	時　期
竪穴住居跡	36	古墳後期～奈良16、平安11、中世9
掘立柱建物跡	10以上	古墳後期1、中・近世9以上
溝跡	25	中・近世
水田・畑跡	13	古墳後期以前水田跡1、中世畑跡2、中・近世水田跡10
土坑	約1,200	中・近世
その他		集石遺構2、遺物集中2、中世墓跡2、近世墓跡2

出土遺物

種　類	時期・内容
土　器	古墳後期土師器、須恵器、奈良・平安土師器、須恵器、灰釉陶器、中・近世陶磁器
石　器	砥石、紡錘車、弦網石、石臼、石鉢
木製品	曲物側板、柱材、加工木
金属器	銅銭、短刀、刀子等

千曲川川べりに営まれた古墳時代～近世の集落跡と水田跡

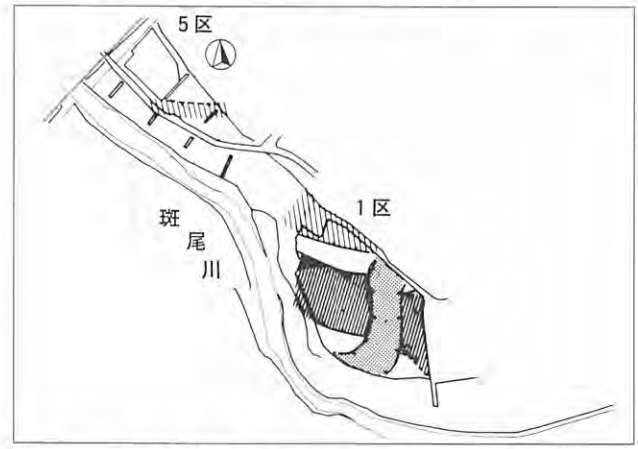
川久保遺跡は斑尾川合流地点の左岸にある。千曲川は中野市に入って盆地西縁の低い山地帯に入り、狭隘な谷内を流れる。そのため、増水時には遺跡一帯は洪水の影響を受けやすく、遺跡名が示すように、水流によって削られた旧河道跡を示すくぼ地がいくつも形成されていた。

川久保遺跡の調査は千曲川の築堤工事に伴って昨年から着手され、本年は昨年度調査地点の西側―斑尾川沿いの1区、5区、6区と呼称した場所を発掘した。6区については計画洪水位（HWL）にかかわって試掘調査のみで終了し、5区は対象地範囲の半分ほど調査した。

第6図　川久保遺跡の位置　（1：100,000）

地形のうつり変わりと遺構　本年度の調査地は、浸食によってできた3本の旧河道跡と洪水によって発生した土の堆積によって形づくられている。

最も古いくぼ地地形は、斑尾川上流側の5区南西部から千曲川沿いの1区北東部を北西―南東方向に貫くもので、くぼ地内から洪水砂層によって埋没した古墳後期以前の水田跡を検出した。そのくぼ地は次第に埋積して浅くなっており、両岸に古墳時代後期の住居跡が並んでいた。



第7図　川久保遺跡くぼ地地形模式

古墳時代後期から奈良時代にかけては、大きな洪水土の堆積もくぼ地の形成も認められず、比較的安定した環境だったと思われる。ただし、くぼ地東岸の5区では奈良時代の竪穴住居跡を検出したが、1区では平安時代まで遺構はない。

平安時代は、1区中央付近で北西―南東方向に貫くくぼ地地形、さらにそれを切って南西―北東方向にカーブする平安末期以前のものが重なって形成されている。大規模な洪水に見舞われたのであろう。

第８図　古墳後期の竪穴住居跡

くぼ地地形の形成は平安時代以後は認められず、ひたすら洪水土の堆積により、地表面の上昇と地形の平坦化が進んでいる。そして、最終的には千曲川側へ緩やかに傾斜する地形となっている。この平安末期から鎌倉初頭以後は水田域として継続的に利用されていることが、洪水砂層で覆われる比較的良好な水田面数枚の調査から判明した。

まず、平安末期頃は１・５区の微高地で竪穴建物跡、掘立柱建物跡、焼土跡、墓跡および畑跡、くぼ地地形内では水田跡が検出された。墓跡は伸展葬が１基、土坑周囲を方形の溝で区画した墓跡と推測されるものが１基ある。竪穴建物跡は平面形が方形もしくは長方形、柱穴は４～６本で、中央からやや壁に寄った壁脇に地床炉を設置している。また、廃絶後の竪穴建物跡のくぼ地内でも畑跡が確認された。水田跡はくぼ地地形内のみ分布し、最も低い場所に用水を配し、その屈曲部に横木を杭で固定した堰を設けている。

次の鎌倉時代の水田跡は微高地まで広がり、くぼ地縁に用水を配置している。この様子は室町時代の水田跡まで継承されているが、戦国時代頃の水田跡では用水がなく、水田区画も等高線方向に長くとる水田が多い傾向が認められる。

第９図　中世の掘立柱建物跡群

江戸時代中ごろの水田跡では１区北端のやや高い地点の一角に屋敷跡がみつかり、用水はその屋敷脇を通って小高い南西部の水田に続くように検出された。小さな水田が多く、畦下側を杭で補強した畦跡や水田面に並列する畝状の浅い溝跡が検出された。なお、屋敷跡は馬屋と思われる浅い不整長方形の落ち込みを伴う掘立柱建物跡が母屋と推定され、その南側には土坑数基と空き地が伴う。馬屋の存在から、馬を耕作手段にもつ農民の屋敷と思われる。

江戸時代後期の水田跡は千曲川側へ傾斜する地形を大きく階段状に造成し、石組を芯とする畦跡が特徴的に認められた。

第10図　江戸時代中頃の水田跡と屋敷跡

土地利用の変化　本遺跡は古墳時代～平安時代までは断続的ながら、平安時代末以後は連続的に利用されていることがわかった。弥生時代後期や平安時代の水田遺構は明らかにできなかったものの、古墳前・後期と思われる水田跡が昨年度の調査で検出されており、基本的には水田耕作とかかわってきた遺跡といえよう。遺跡の場所は洪水を受けやすく、水田耕作には不向きとも思われるが、平安時代以前では浸食に伴うくぼ地が水田耕作に適し、平安時代末以後は斑尾川から取水しやすい立地環境が、継続的な水田域利用を可能にしたと思われる。詳細は今後の整理作業による。

（3） 南曽峯遺跡（北陸新幹線関連）

所在地及び交通案内：長野市豊野大字蟹沢字南曽峯　上信越自動車道信州中野ICから国道117号線を長野方面へ2km。5分。

遺跡の立地環境：千曲川左岸の丘陵上およびその裾野

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.9.14～12.9	1,700㎡	鶴田典昭　西香子

検出遺構

種　類	数	時　期
遺物集中	1	旧石器（次年度本調査）
竪穴住居	2	平安
土坑、ピット	33	平安、近世以降
溝	2	縄文、平安

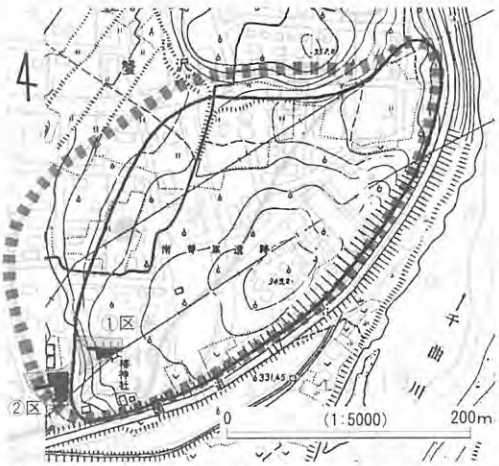
出土遺物

種　類	時期・内容
土　器	縄文早期、弥生中期、平安
石　器	旧石器、縄文・弥生時代の石鏃、磨製石斧、磨製石包丁未製品？
その他	縄文土錘、古墳銅鏡片、近世古銭

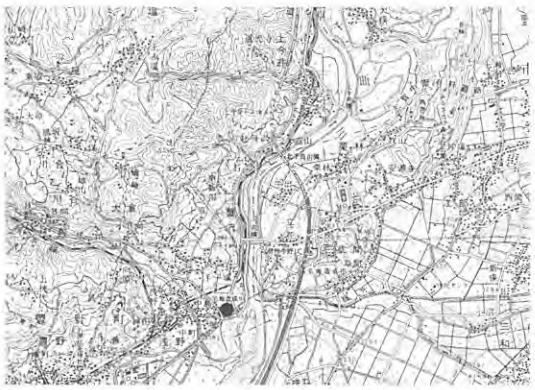
千曲川に面した丘陵上の集落跡

南曽峯遺跡は通称月見台とよばれる丘陵上に広がる遺跡で、丘陵の大半は宅地造成などによりすでに削平されている。今回は、わずかに残された丘陵の南端部の調査となった。

丘陵上の①区では、平安時代の竪穴住居跡と旧石器時代のブロックを検出した。丘陵裾野の②区では、縄文時代早期以前の河川跡と推定される溝を検出した。その覆土から、弥生時代中期と平安時代の土器、石器が多量に出土したほか、土錘、銅鏡破片（古墳時代）などが出土した。



第11図　丘陵削平以前の旧地形と調査範囲


第12図　南曽峯遺跡の位置（1：100,000）

溝は丘陵の裾野に沿っており、多量の土器、石器とともに、人頭大の礫が多数出土した。これらは意図的に配置された構造物ではない。黒色土中に面をなしているため、丘陵上部から短期間に崩れ落ちたか、または投げ込まれた結果堆積したものであろう。出土遺物から、礫の集積時期は平安時代後半と判断しているが、詳細は今後の資料分析の結果を待ちたい。

南曽峯遺跡では、平成5年度の旧豊野町教育委員会による調査で、弥生時代中期の遺構が確認されており、丘陵上の環濠集落の可能性が指摘されている。調査当初、遺跡の広がりが予想されていなかった裾野に、弥生時代中期と平安時代の多量な遺物を含む溝が確認された。遺物出土状況から、弥生時代中期には2区の西側にも集落などの生活域が想定され、遺跡が丘陵上のみでなく、裾野部にも広がる可能性が高くなった。

第13図　土坑から出土した鏡片

（4）沢田鍋土遺跡（北陸新幹線関連）

所在地及び交通案内：中野市大字立ヶ花字鍋土

上信越自動車道信州中野ICから0.5km。5分。

遺跡の立地環境：千曲川右岸の丘陵上の緩斜面

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.10.26～12.21	450㎡	鶴田典昭　西 香子

検出遺構

種　類	数	時　期
土坑	15	時期不明
溝	3	近世以降

出土遺物

種　類	時期・内容
土　器	奈良・平安、近世
石　器	旧石器剥片、縄文打製石斧

高丘丘陵周辺の旧石器時代の一資料

遺跡が所在する高丘丘陵は、古くから、古代の須恵器窯跡群が点在する丘陵として知られている。周辺の過去の調査結果から(註1)、旧石器時代の遺物集中区、古代の粘土採掘跡や竪穴住居などの土器生産に関わる遺構を想定して調査を開始した。

発掘調査の結果、近世以降の溝、時期不明の土坑が検出された。遺物では、旧石器時代の黒曜石とチャートの剥片と砕片が10点出土した。この他、縄文時代の打製石斧や、奈良・平安時代の須恵器と土師器が出土した。

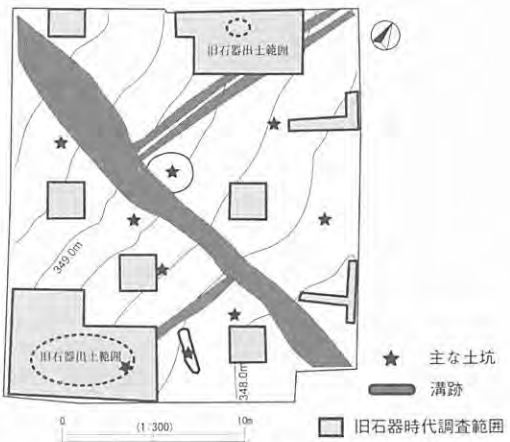
出土状況から、遺物は斜面上方からもたらされたものと推定される。周辺の調査成果を勘案すると、調査区の西側の斜面上方には、土器生産にかかわる粘土採掘跡、竪穴住居跡などの遺構の存在が想定される。

第14図　沢田鍋土遺跡の全景

第15図　沢田鍋土遺跡の位置（1：100,000）

旧石器時代の石器群は砕片が主体であり、その内容や時期は不明である。1994年調査の沢田鍋土遺跡、中野市がまん淵遺跡および長野市南曽峯遺跡で出土した石器群に対し、後期旧石器時代を遡る石器群である可能性が指摘されている(註2)。しかし、これらの遺跡では土層が薄く、表土直下に石器包含層があり、その年代を示すデータが得られていない。今回、旧石器出土層位とその上下の層における光ルミネッセンス法による年代測定を予定している。高丘丘陵周辺の旧石器時代遺物包含層の年代を知る手がかりの一つになると考えている。

註1）・2）　長野県埋蔵文化財センター1997『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書24』、中野市教育委員会1995『沢田鍋土遺跡』



第16図　沢田鍋土遺跡の遺構の概略

（5） 表町遺跡（（主）長野荒瀬原線関連）

所在地及び交通案内：飯綱町大字牟礼字表町他

国道18号線普光寺より旧北国街道（長野荒瀬原線）を、牟礼中心部を抜け長野市方面（南）へ約1.5km

遺跡の立地環境：長野市北部三登山北麓斜面の先端部。矢筒山ふもとへ続く緩やかな北斜面

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.8.1～12.9	7,000㎡	中野亮一　入沢昌基

検出遺構

種　類	数	時　期
竪穴住居跡	1	平安前半（9世紀頃）
掘立柱建物跡	9	中世
溝	16	平安、中世、近世以降
井　戸	15	中世
土　坑	525	縄文、平安、中世、近世以降

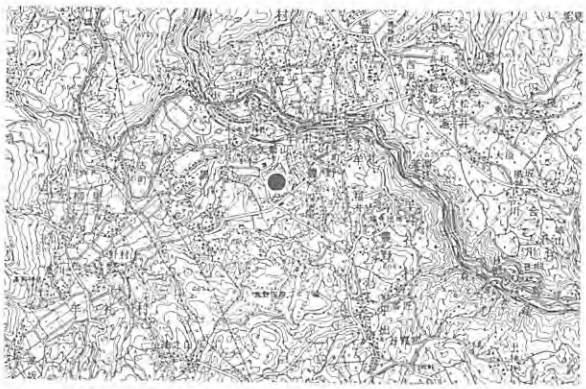
出土遺物

種　類	時期・内容
土　器	平安（土師器・須恵器・黒色土器）、中世（内耳土器、かわらけ）、中・近世陶磁器
石　器	縄文（黒曜石剥片）、中世（石臼多数、石鉢、石皿、くぼみ石）
木製品	曲物、臼、農具、椀、杭など
金属類	銅銭（宋銭、寛永通宝）、鉄製品（釘など）、鉄滓

矢筒城のふもとに展開した中世のムラ

本遺跡は、矢筒城が築かれた矢筒山の麓へと続く、緩やかな北斜面に立地する。字名は城の表（南側）に広がることからつけられたといわれている。本格的な調査は初めてで、以前から縄文時代の石斧、平安時代の須恵器、中・近世の陶磁器など、さまざまな遺物が採集されている。平成11年に本年度調査区約60m東において、旧牟礼村教育委員会が試掘調査をおこなった。遺物はほとんど出土しなかったが、中世と思われる土坑や溝が検出され、大規模な集落遺跡となる可能性が指摘されていた。

本年度の調査では、湧水の激しい場所などを除き、幅約20m、長さ約340mの南北に細長く伸びる調査区全面で、城の存続期間と重なる中世の遺構を確認した。それは、掘立柱建物の柱穴跡を含む土坑約550基、井戸及び溝などである。なかでも井戸が多く、現時点で15基を井戸と判断している。すべて素掘りで、内部に石組みや木枠などはなく、深いものは検出面から3mを越すものもあった。井戸は調査区の全面で確認され、場所によっては半径10mほどの範囲に7基集中しているところもあった。これらが同時期に存在したものか、今後、出土遺物や他遺跡の様子などを詳細に調べながら検討していきたい。



第17図　表町遺跡の位置（1：100,000）

中世の遺物は、さほど多くないが、内耳土器、かわらけ、瀬戸産陶器及び中国製陶磁器など中世を代表する製品で、製作時期は15世紀後半～16世紀前半のものがほとんどである。井戸の内部からは、石臼や石鉢、木製品が多く出土した。特に木製品は手馬鍬と思われる農具、漆塗り椀、曲物、臼など多種類みつかり、当時の生活を知る上で貴重な資料となる。

中世以外の遺物・遺構では、縄文時代と思われる溝状土坑と平安時代竪穴住居跡や土坑、溝を確認した。

第18図　井戸出土の木製農具（手馬鍬？）出土状況

溝状土坑は、飯山市や信濃町など北信濃一帯で広くみられ、「Tピット」「溝状ピット」とも呼称されている。4～8m位の間隔を空けて並行に配置しているのが特徴である。落とし穴的なものとされている。本遺跡では、調査区の幅がせまいため、それぞれの列で2基ずつしかなかった。時期については、重複するどの遺構よりも古いこと、埋土も他とまったく違う黒色の強いものであること、遺跡周辺において縄文時代の遺物が採集されていることなどから、縄文時代と判断している。

第19図　井戸（SK101）と溝状土坑（SK162）

確認された竪穴住居跡は1軒のみで、まわりに大集落があった様子はない。昨年度調査した本遺跡の南に隣接する西四ツ屋遺跡でも、平安時代前期の住居跡が1軒だけみつかった。本遺跡の住居も出土土器の様子などから、ほぼ同時期のものと思われる。古代において表町から西四ツ屋にかけて大集落はなく、単独住居あるいは小規模集落が散在していた様子が推察される。

以上、本年度調査結果から、現時点では以下のような状況が想定される。本遺跡周辺は、縄文時代頃は狩猟の場、古代になって人が住み始めたが、集落といえるような規模ではなかった。ところが15世紀半ば頃から集落が形成された。しかし、その集落は長続きせず、16世紀の終わり頃にかけて姿を消していった。

この地が居住に適さないとする根拠のひとつとして水利の悪さがある。この付近は台地の上で、地表における水の流れがほとんどない。現在もほとんどが畑となっており、水田はわずかである。みつかった井戸が多いことも、中世の人びとが水を得るために苦労した様子を物語っている。

ではなぜ中世は集落が形成されたのか？

その答えが矢筒城との関係にあるのではないか。ただ、昭和54年に旧牟礼村教育委員会がおこなった調査では城跡から遺物が出土していないため、年代的な比較検討ができない。

一方、集落の継続期間が短いことも、城との関係を重視すると理解しやすい。

文献上からすると、集落の廃絶時期については、ふたつの可能性が考えられる。

ひとつは、永禄・天正年間（1560～1570年代）頃である。この時期、牟礼の地は上杉氏と武田氏の戦場となり、一帯は荒廃していたとの記録がある。矢筒城も使用されていなかったらしい。

もうひとつは近世初頭の北国街道整備と共に、牟礼宿（現在の牟礼中心部）へ移ったとする考えである。牟礼宿の発足は慶長16年（1611）頃で、宿場作りにあたり表町の集落を移したとするものである。出土遺物の製作年代は15世紀後半～16世紀前半であるが、制作年代と使用時のずれを考慮すれば、16世紀終わり頃まで集落が続いていたことは考えられる。

本遺跡報告書作成にむけての整理作業では、中世集落の解明が、最重要なテーマと考える。今年度の表町遺跡の調査は対象面積の半分であり、まだ情報が不足している。来年度以降はさらに城に近い場所で調査を継続していく予定である。今後の調査で、情報収集はもちろん、先にあげたテーマを踏まえた上での検討が必要である。

第20図　遺跡からみた矢筒城館跡（中央）

（6） 東條遺跡（坂城更埴バイパス関連）

所在地及び交通案内：千曲市八幡東條JR篠ノ井線姨捨駅下車　千曲市営バス斎の森神社前バス停下車　徒歩１分

更埴ICより上田方面。平和橋を渡って「辻」交差点を左折、姨捨駅方面へ。

遺跡の立地環境：姨捨土石流台地から連なる押し出し地形の末端部に位置し、遺跡東端は千曲川左岸の後背湿地に隣接する。

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.8.1～12.9	1,200㎡	町田勝則　小林秀行

検出遺構

種　類	数	時　期
住居跡	2	奈良・平安２
掘立柱建物跡	9	奈良・平安６　中・近世３
溝	1	中世１
水田跡	1	中・近世１
土坑　井戸跡 柱穴等	多数	平安、中・近世

出土遺物

種　類	時期・内容
土　器	奈良、平安、中世
金属器	銭貨「元豊通寶」ほか
木製品	中・近世の漆器、箸、曲物、籠、下駄など

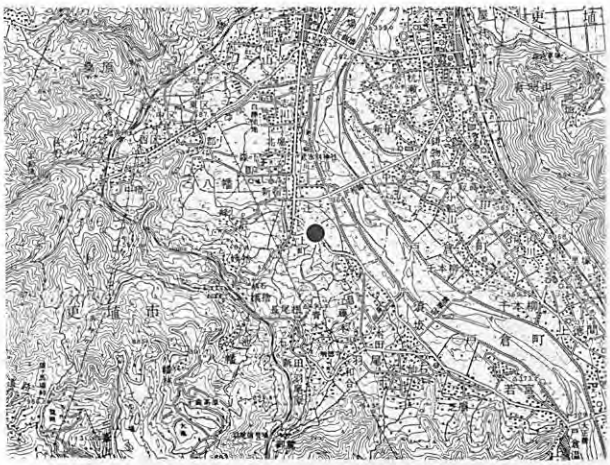
中世の生活跡

漆器や下駄などの木製品が出土

平成13・14年度の調査に引き続いて遺跡の一部を調査した。前回、千曲川氾濫原に近い地点で古墳時代後期の住居跡がまとまって検出されたが、今回の地区では、この時期の遺構はなく、奈良・平安時代の住居跡２軒と掘立柱建物跡９棟を検出した。注目すべきことは、中世のものとみられる木製品（曲物類、漆器、箸、椀、下駄、籠）や陶磁器片、銭貨などが相当量が出土したことである。石組みの井戸跡からは、漆塗り椀類、下駄、曲物及び銭貨などが出土しており、その周辺で検出した柱材、柱穴、炭化物層の広がり等を合わせ考えると、屋敷跡のような遺構の存在が予想できそうである。

付近一帯は「八日市場」と呼ばれている。字名の由来から、市が行われていた地籍と考えられる。農具が出土していない点や優品の漆器類が豊富な点、また、試掘調査を実施した西側の地区（斎の森神社寄り）にも屋敷跡と考えられる土間状の遺構があることから、斎の森神社脇を通る街道に沿って、中世の屋敷跡さらには町屋が広がる可能性がある。

第21図　出土した漆皿



第22図　東條遺跡の位置（１：100,000）

第23図　井戸跡

（7） 力石条里 遺跡群
（県道長野上田線力石バイパス関連）

所在地及び交通案内：千曲市上山田字薬師堂

県道長野上田線の力石集落西側、岩井堂山の北東山麓に位置する。

遺跡の立地環境：千曲川左岸の沖積地

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.4.19～12.6	2,305㎡	西香子　山﨑まゆみ

検出遺構

種　類	数	時　期
竪穴住居跡	6	弥生後期
溝	15	弥生中・後期、古墳、古代以降
水田跡	1	古代以降
土　坑	77	弥生中・後期ほか

出土遺物

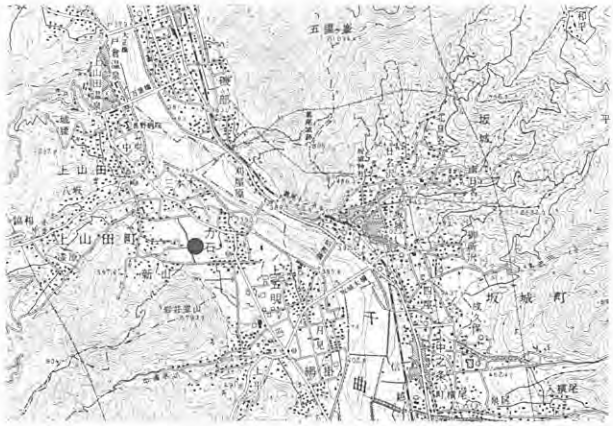
種　類	時期・内容
土　器	弥生、古墳、古代以降
石　器	弥生、古代以降

力石地区の土地利用

力石条里遺跡群では、今までに旧上山田町教育委員会や、埋文センターにより発掘調査がおこなわれており、弥生後期の集落跡や、古代以降の水田跡などが確認されている。また、平成14・16年度の調査では、弥生前期末から中期初頭の土器棺再葬墓２基を含む墓坑が、まとまって確認されている。

本年度は、②・⑤・⑦区の調査をおこない、弥生中期の溝跡、後期の竪穴住居跡及び古墳以降の水田跡や溝跡を確認した。

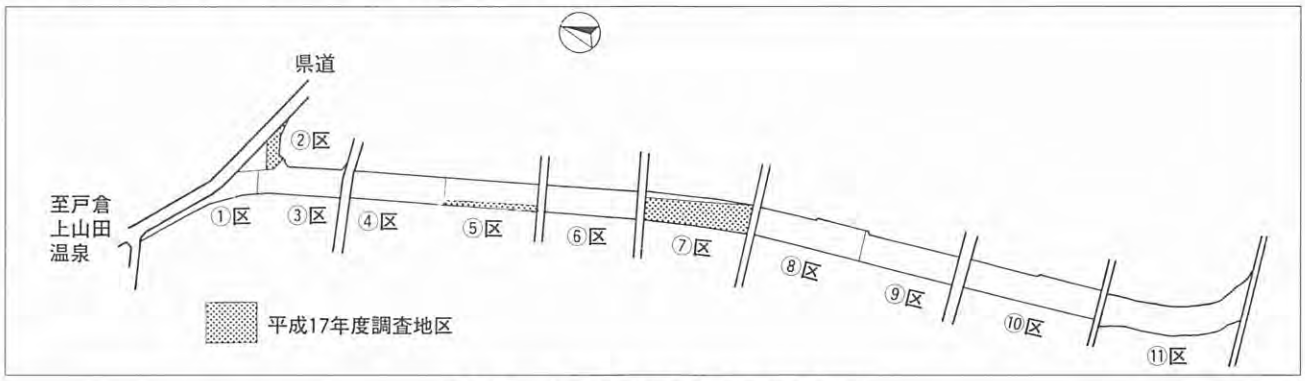
平成14年度からの４年間にわたる調査で、本遺跡では弥生前期末から中世までの遺構が調査されてきた。南北に長く延びる調査区内で確認される遺構の種類や密度が、年代や場所によって変化していることがわかってきた。



第24図　力石条里遺跡群の位置（１：100,000）

弥生前期末～中期初頭に⑩区で墓が、弥生中期後半には⑥区で住居が営まれる。いずれも微高地上に立地している。また、弥生後期には、その微高地がわずかに北へ広がり、⑤・⑥区及び⑨・⑩区で、中期よりも規模の大きな集落となる。古墳時代から古代にかけては、千曲川の氾濫のためか、ほとんどの地区が水田や流路、湿地などに移行してしまうが、中世頃になると、建物跡や井戸、墓などの遺構が④・⑤・⑥・⑧・⑩・⑪区において点在することが確認されている。こうした変遷は、千曲川の氾濫や流路の移動によって形成された微地形に大きく左右されていると思われる。

第25図　溝から出土した石包丁



第26図　力石条里遺跡群の調査区配置

(8) 天神城跡（県道湯沢望月線天神バイパス関連）

所在地及び交通案内：佐久市大字協和字塚田

旧望月町(望月宿)の市街地から、鹿曲川左岸を南へ約1.2km遡ると、西側に管公社が見えてくる。この社の南側が調査区である。天神城主郭からは、南西へ500m余りの地点。

遺跡の立地環境：鹿曲川と八丁地川に挟まれ、北西方向に緩傾斜する段丘を利用して城郭が築造されている。調査地点は、城郭主体部より標高が高く、面積も広くなる南側平坦面の一部と、その北西および南東の両崖面である。

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.7.13～8.31	3,000㎡	寺内隆夫　中野亮一

検出遺構

種　類	数	時　期
溝	3	中世
ピット	5	不明
焼土跡	1	不明

出土遺物

種　類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文、弥生、平安、中世、近世
石　器	縄文、中世砥石
金属器	近世キセル

城郭の隣接地に掘られた土地区画溝

天神城城郭施設の確認　今回の調査区は、大きく3ヶ所に分かれており、いずれも城郭施設が明瞭な地区からは若干離れた地点である。そのため、調査の目的は城郭施設がこの範囲まで続くのかが最大の焦点であった。

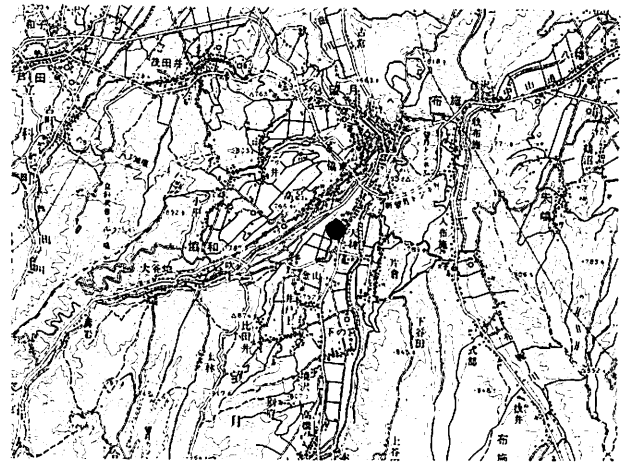
北西側崖面(1区)では竪堀の有無を確認すること。南東側崖面(2区斜面部)では、段状を呈する地形が帯曲輪か否かを確認すること。台地上の平坦面(2区平坦部)では、城郭に関連する施設の有無を確認すること、などが課題であった。

残念ながら、北西崖面での竪堀は存在せず、また、南東崖面の段状施設は帯曲輪ではなく、後世の耕地造成の可能性が高いと判断した。

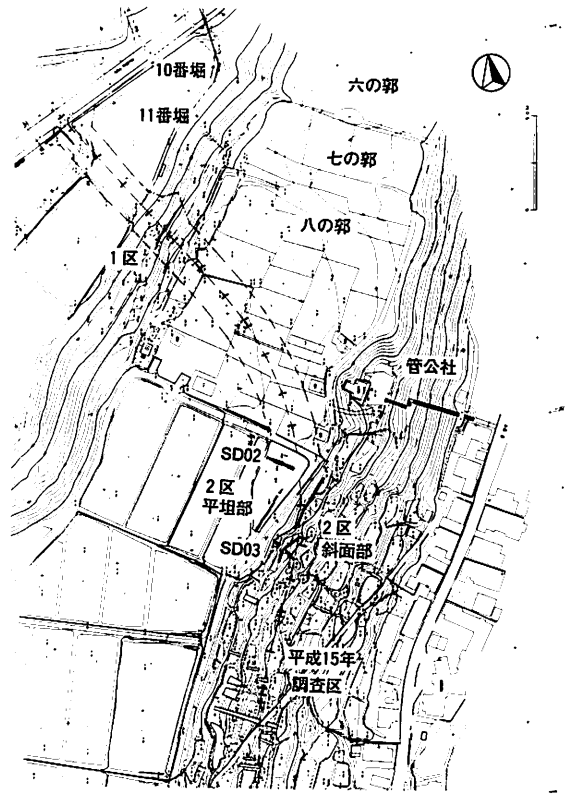
中世の土地区画溝　一方、平坦面では溝3条を確認した。2条は台地を横断し、1条は地形変換線に沿っており、前者とほぼ直交する。これらの溝は城郭中心部の竪堀に比べると規模が極端に小さい。小字の字界線とほぼ一致する場所にあることから、土地の境界線を示すものと考えられる。

近世以降の遺物が皆無であるため、中世に掘削された溝と考えられる。

古代以前の遺物　ほ場整備事業がおこなわれているため遺構は検出できなかった。しかし、古代以前の土器や石器が出土しており、本来、各時代の遺構が存在していた可能性が高い。



第27図　天神城跡の位置（1：100,000）



第28図　天神城跡と本年度調査地区の位置

（9）西一里塚遺跡（中部横断自動車道関連）

所在地及び交通案内：佐久市岩村田・平塚

JR佐久平駅から国道141号バイパスを経て、県道塩名田佐久線(旧中山道)を浅科方面(西)へ進み、約1km。

遺跡の立地環境：濁川右岸の標高約690m前後をはかる台地部および低地

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.4.21～12.22	10,400㎡	桜井秀雄　白沢勝彦 寺内隆夫

検出遺構

種　類	数	時　期
竪穴住居跡	9	弥生
円形周溝墓	6	弥生
方形周溝墓	5	弥生
溝	17	弥生・平安
土坑	33	弥生～近世
水田	2	平安

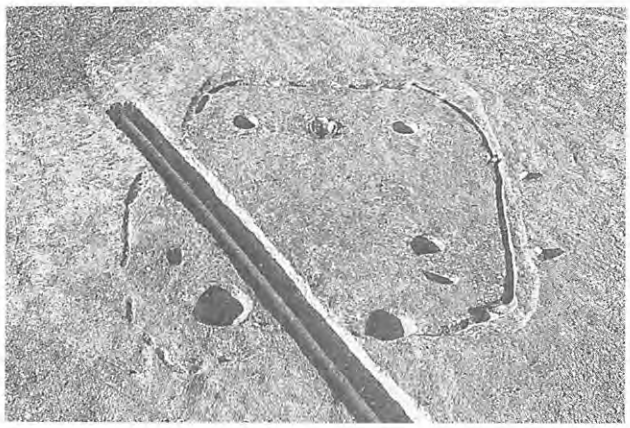
出土遺物

種　類	時期・内容
土器	弥生、平安、近世
土製品	弥生土偶
石器・石製品	弥生石鏃、磨製石斧、勾玉
金属製品	弥生器種不明、近世銭貨
木製品	弥生器種不明、平安建築部材
その他	弥生ガラス玉

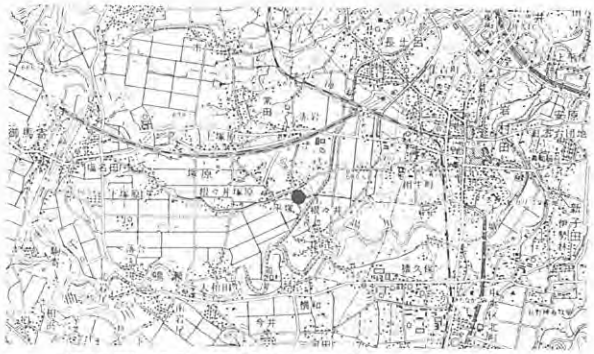
多様な地形と共生した弥生時代後期のムラ

今回の調査区は東西約400mに及び、現景観では、平坦な台地と「流れ山」と呼ばれる約23,000年前の塚原土石なだれによる残丘がみられる。

平坦な台地は、北端および西端で黒色土が厚く



第29図



第30図　西一里塚の位置（1：100,000）

堆積している湿地状の低地へと落ち込んでいくこととが判明した。低地への落ち際に沿っては後期の遺物を包含する溝が掘削されており、これまであまり知られることのなかった弥生時代後期における低地利用の様相が明らかとなった。

台地上では住居跡3軒、溝及び周溝墓等を検出した。台地を南北に縦断する溝よりも西側には周溝墓がみられず、居住域と墓域がその「場」を異にしていた可能性もある。

一方、この周辺に特徴的な地形である「流れ山」は近接する根々井大塚をはじめとして、墳丘

第31図　「流れ山」遠景（北から）

墓や古墳に利用されるものも少なくない。調査区内の「流れ山」は2m程の低い高まりのなだらかな地形を呈する。その斜面上および頂部から弥生時代後期の住居跡が6軒みつかった。居住域として利用された事例のひとつに数えられる。

このように低地を含めた多様な地形の上に展開する本遺跡の事例は、台地中心にとらえられてきた佐久地方の弥生時代後期遺跡に対して、新知見を提示することとなった。来年度の調査でより詳細な状況が判明してくると考えている。

(10) 森平遺跡（中部横断自動車道関連）

所在地及び交通案内：佐久市大字横和字森平
小海線・北中込駅から県道上原猿久保線を浅科方面(西)へ2.7km行き、湯川を北へ渡る。

遺跡の立地環境：湯川が大きく南へ蛇行し、半島状に突出した低位段丘上に立地する。

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.8.22～12.22	3,000㎡	寺内隆夫　桜井秀雄

検出遺構

種　類	数	時　期
住居跡	11	弥生中期
掘立柱建物跡(含む平地住居)	12	弥生中期
溝	9	弥生・古代～近世
土坑(墓など)	9	弥生中期

出土遺物

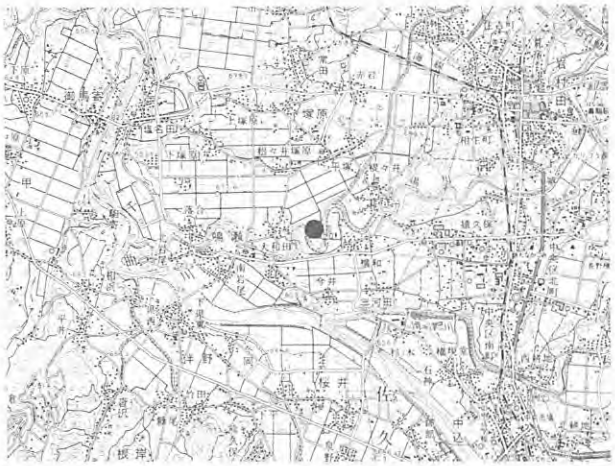
種　類	時期・内容
土　器	弥生中期、平安
石　器	弥生中期
金属器	平安

湯川河岸に立地する弥生時代中期の新発見集落

新発見の遺跡　湯川沿岸は弥生時代中期～後期の集落が発達する地域のひとつである。しかし、これまで湯川に近接した低位段丘上では遺跡の存在は確認されていなかった。そのため、弥生時代の集落立地を再考するための貴重な遺跡である。

弥生時代中期の短期集落　今年度の調査範囲は、想定される集落の北西部にあたり、集落の北境は溝によって画されていた。集落域では、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、平地住居の可能性をもつ遺構、墓や貯蔵穴とみられる土坑を検出した。いずれの施設も同一地区内に点在しており、特に、墓域を設けることなどはしていない。土器型式でみると、弥生時代中期後半の栗林式の時期内に収まるが、竪穴住居跡3軒と掘立柱建物跡1棟の切り合い関係によって、4時期の変遷が認められる。後期まで継続しない、比較的短期的な集落といえよう。

住居の廃絶と遺物廃棄　竪穴住居跡の内、拡張や



第32図　森平遺跡の位置（1：100,000）

重複の少ない7軒から炭化材が出土した(第34図)。一部の住居では床面に焼成を受けた痕跡が認められ、覆土中からは焼土塊が出土した。炭化材の多くは壁際から中央に向かって放射状に残存しており、屋根材や壁材の一部と考えられる。炭化した柱材は検出されなかったが、柱痕は明瞭で、空洞ができるほど軟弱な状況であった。このことから、住居廃絶時には床面下に埋設された部分の柱が残存していたと考えられる。

一方、使用時の状況を残した遺物は認められな

第33図　森平遺跡Ⅰ区の全景

第34図　SB02の炭化物出土状況

かったため、不慮の火災ではなく、住居廃絶時に柱材や屋根材がある程度残った状態で火入れ行為がなされた可能性が高い。

住居中央部から北側にかけて、多量の礫や石器、土器のほか、強い焼成を受けて破砕した骨（獣骨か？）が出土する事例が5軒で認められた。完形やそれに近い土器が多い。また、床面直上に壺の口縁部を置き、それに底部を伏せた例（第36図矢印）などがあり、住居廃絶時かその後におこなわれた儀礼的な廃棄であった可能性が高い。

竪穴住居以外の施設　掘立柱建物は1間×3間～1間×5間程度の規模で、柱は竪穴住居に比べて小規模である。また、掘り込みが明瞭でなく、竪穴住居と同等の4本柱をもち、地床炉と台石を有する建物が認められた。炉形態が埋甕炉、石囲炉または土器敷き炉をもつ竪穴住居と異なることから、平地住居の可能性が考えられる。

墓坑とみられる長方形の土坑では、埋土中から破砕された土器小破片と小礫が多量に出土する点

第35図　SB01遺物出土状況

第36図　SB01遺物集中廃棄地点

を特徴とする。この他、円形で小ピットを伴う土坑などがみつかっている。

磨製石器の搬入と製作　注目すべき遺物としては、各竪穴住居跡から出土した磨製石器類があげられる。太形蛤刃石斧・扁平片刃石斧は各竪穴住居跡から出土し、磨製石鏃がこれに次ぐ。

太形蛤刃石斧に関しては、長野盆地方面から搬入されたとみられる未使用に近い優品が含まれている。一方で、刃部再生された石斧もあり、再調整に使われたとみられる大形砥石が出土している。

磨製石鏃にも複数の石材があり、未製品や剥片が存在することから、搬入品のほかに集落内で製作もおこなわれていたようである。

第37図　おもな出土土器・石器

遺跡の状況　未周知の遺跡であったため、集落跡の中心部はすでに道路建設工事が着工されてしまい、調査ができなかった。市道と交差する構造物部分は完全に掘削されてしまったが、それ以外の盛り土部分では、包含層が保存されている可能性が高く、将来、調査の対象となることを願いたい。

(11) 矢出川遺跡群（やでがわ）（県営畑地帯総合整備事業関連）

所在地及び交通案内：南佐久郡南牧村野辺山二ッ山

小海線・野辺山駅より南へ2.0～2.3km 付近。東西に延びる道路・幹線７号線部分が今回の調査対象地である。周知の矢出川第Ⅵ・第Ⅶ遺跡、第59・第65地点に隣接する地点。

遺跡の立地環境：矢出川の右岸、飯盛山（めしもり）北麓に位置し、野辺山原面(段丘堆積物)と飯盛山から北へ延びる丘陵との境界線上近くに立地。

特に旧石器時代の石器ブロックは、上記の丘陵のうち、尾根筋からやや東に下った場所で確認された。東斜面下には小さな沢がある。

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
16.4.11～6.2	3,000㎡	寺内隆夫　中野亮一

検出遺構

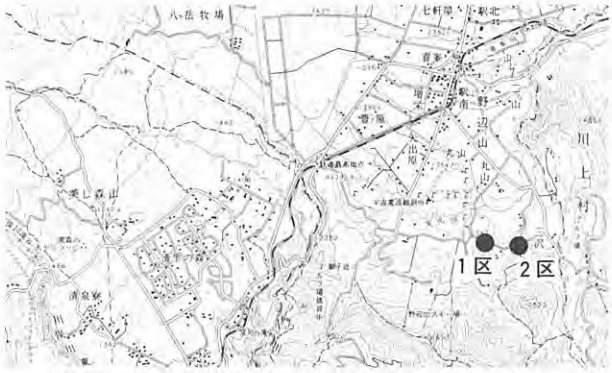
種　類	数	時　期
石器ブロック	1	旧石器

出土遺物

種　類	時期・内容
石　器	旧石器角錐状石器？、掻器、石核、剥片ほか

2万年以前に遡る可能性をもつ石器ブロック

矢出川遺跡群は、約１万数千年前に遡る細石刃（さいせきじん）文化の遺跡として著名である。これらは主にローム層(Ⅲ層)上部～黒色土層(Ⅱ層)で出土する。

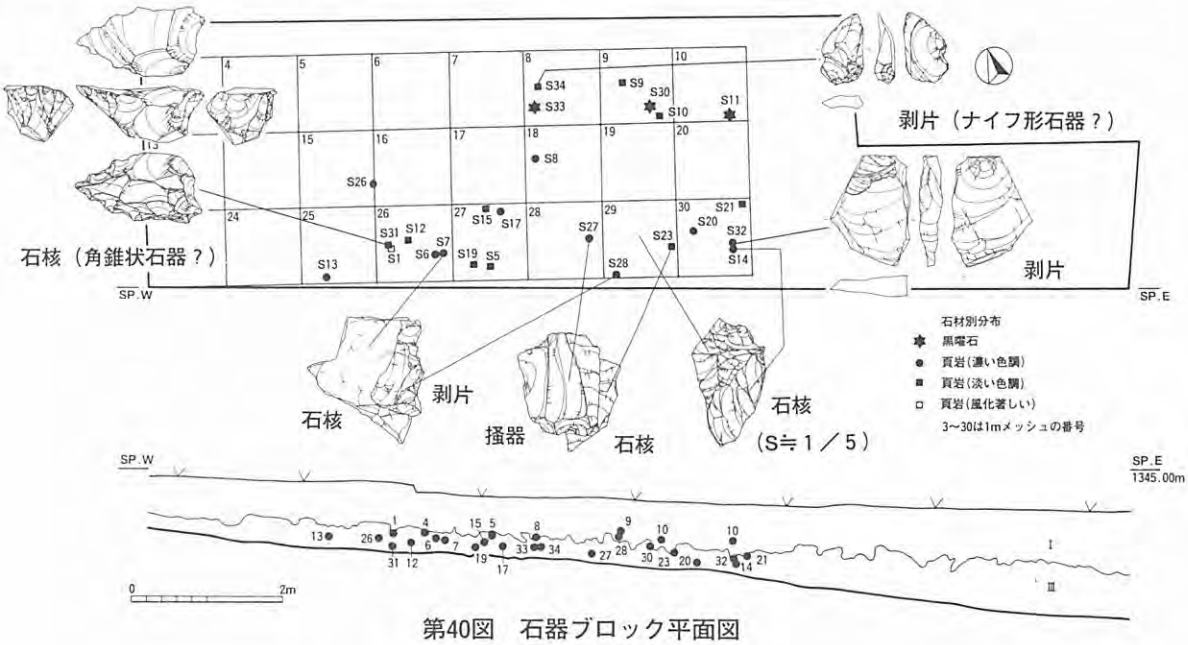


第38図　矢出川遺跡群の位置（1：100,000）

今回の調査では、Ⅲ層中～下部で石器ブロックが発見された。定型的な石器はほとんどなく、掻器（そうき）のほか、角錐状（かくすいじょう）石器やナイフ形石器の可能性をもつ石核（せきかく）や剥片が出土した。

これまで野辺山地区では、細石刃を遡る時期の資料は採取資料が中心であったため、今回の調査で石器ブロックが発見された意義は大きい。

第39図　第１号ブロックと初夏の八ヶ岳



第40図　石器ブロック平面図

(12) 御社宮司遺跡（国道20号坂室バイパス）

所在地及び交通案内：茅野市大字宮川

中央自動車道諏訪ICから国道20号線を甲府方面に約4km。

遺跡の立地環境：諏訪盆地の南側、上川と宮川の氾濫で形成された沖積低地に立地する。

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.7.13～	834㎡（本調査）	河西克造
9.30	5,000㎡（試　掘）	廣田和穂

検出遺構

種　類	数	時　期
水田跡（含、畦畔）	2	平安1、近世1
大畦畔	1	近世
集石	7	近世
溝	2	中世1、不明1
竪穴・区画	5	近世以降
不明遺構	1	近世以降

出土遺物

種　類	時期・内容
土　器	平安土師器、灰釉陶器、中世陶器、近世陶磁器
石　器	縄文打製石斧、黒曜石、凹石
金属器	鉄釘

宮川の洪水で埋まった近世の水田跡

御社宮司遺跡は、ほぼ中央部を中央自動車道が横断しており、20号バイパス用地は中央道の高架下をほぼ東西に交差する。

中央道建設に伴う調査(昭和52・53年)は、諏訪地域における本格的な沖積地調査として意義深いもので、発見された縄文時代晩期の集落跡は、当該期の遺跡立地や構造を考える上で貴重な資料となった。

今回は、バイパス建設に伴う発掘で、本調査と遺跡範囲を捉える試掘調査を並行して実施した。

本調査では、近世と平安時代の水田跡を検出した。この近世水田は、大畦畔が地形の高まりを利用して構築されており、水田域は不整形な水田区画や小区画による田面と、水田区画に沿って掘削された方形の竪穴群とで構成される。両者は、宮川起源の同一の洪水で埋没しており、水田層出土

第41図　御社宮司遺跡の位置（1：100,000）

遺物から18世紀に比定される。竪穴には砂礫が充満するのみで、機能の解明は今後の課題である。

この近世水田は、中央道調査で確認された「中世以降の畦畔状遺構」と同一遺構である。今回の調査では、埋没時期が近世と判明し、水田域がバイパス用地まで広がっていることがわかった。

平安水田は、水田層から出土した土師器から、11世紀代に比定できる。畦畔が検出されたのみで、水田構造は来年度以降の調査で明らかにしたい。

試掘調査では、遺跡中央部の北限が田沢沢川付近、南限はほぼ周知の範囲まで広がることが確認された。

来年度以降の調査では、近世水田と平安水田、中央道調査で確認された縄文、古墳及び中世の集落跡の広がりを捉え、遺跡の土地利用を明らかにすることが大きな課題となる。

第42図　近世水田の全景（手前：大畦畔　奥：竪穴および水田跡）

(13) 駒形遺跡（県道諏訪茅野線関連）

所在地及び交通案内：茅野市米沢地区

中央自動車道諏訪ICから、ビーナスラインを白樺湖方面へ車で15分。

遺跡の立地環境：霧ヶ峰の踊り場湿原「池のくるみ」を源とする桧沢川によって形成された扇状地の桧沢川左岸に位置する。

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.8.22～12.2	400㎡	贄田　明　藤原直人

検出遺構

種　類	数	時　期
竪穴住居跡	15	縄文前期前葉
方形柱穴列	4	縄文前期前葉
土坑	10	縄文前期前葉

出土遺物

種　類	時期・内容
土　器	縄文前期初頭～前葉土器群
石　器	縄文前期初頭～前葉（石鏃、石匙、スクレイパー、石錐、磨石、くぼみ石、石皿、黒曜石の原石・剥片類）

縄文前期の集落跡

調査の概要　昨年度は県道諏訪茅野線の本線部分について調査をおこない、縄文時代前期初頭から前葉にかけての集落跡を検出した。今年度は本線の一部と、本線への取り付け道路となる6地点が調査の対象であり、いずれも昨年度の調査区に隣接している。そのため、前期集落の継続調査になると予想されたが、調査の結果、集落構造を復元するための良好な手がかりを得ることができた。

前期集落の範囲　本線部分の調査区は、東西両側が昨年度の調査区に挟まれており、昨年度から続いて竪穴住居跡や方形柱穴列・土坑が検出された。遺構の切り合いが激しい。出土遺物の時期より、前期初頭から前葉、中道式期から神ノ木式期にかけての遺構が重複しているものと考えられる。

取り付け道路部分の調査区は、本線の南側に3地点、北側に3地点が位置し、状況はその南北でかなり異なる。本線の南側は、本線部分と同様に竪穴住居跡や方形柱穴列が検出され、さらに遺構の一部が調査区外へと延びる。本線の南側は、宅地との間に広く畑地があり、同時期の遺物を採集することができる。こうした状況から判断すれば、本線から南側の畑地一帯にかけて、大規模な前期集落が展開する可能性は極めて高く、その範囲は宅地や宅地内を通過する道路付近にまでおよぶ可能性を指摘しておきたい。

一方、北側は3地点すべてにおいて遺構・遺物がまったく検出されず、前期集落に関係する遺構の分布がここで途切れる状況を呈している。ところが、縄文前期初頭から前葉の遺構は、県道諏訪茅野線の北側で、地形的に一段高い位置にあたる、国史跡の範囲内でも検出されている。平成6・8年、県教育委員会によって実施された分布・試掘調査で検出されたものであり、県道諏訪茅野線とは直線距離にして約80m離れ、標高は7～10mの高低差が認められる。昨年度の調査

第43図　駒形遺跡の位置（1：100,000）

第44図　調査区の状況（一部）

では、両者は連続する同一集落であるという評価を下したが、遺構分布が途切れる点を重視すれば、両者は異なる集落であったとする考え方もできる。その場合、同時期の隣接地に、集落が並存して営まれていた状況が浮かび上がる。

検出された遺構の特徴　今年度の調査で検出された遺構は、昨年度と同様に竪穴住居跡、方形柱穴列、土坑で、ほかに遺物の集中地点がある。

竪穴住居跡と方形柱穴列は、同一範囲に位置して切り合い、その新旧関係および出土遺物の時期などから、何時期かにわたる集落変遷の中で、いわば居住の場に並存した施設であったと考えられる。ところが、同じ茅野市の阿久尻遺跡(茅野市教育委員会1993)は、駒形遺跡と状況が異なり、竪穴住居跡と方形柱穴列が集落内部で違う空間に存在する上、切り合い関係も認められない。こうした差異は、方形柱穴列の機能や、集落自体の性格などに深く関わるものと考えられる。

土坑は、昨年度調査分と同様に南側の調査区境付近にみられ、調査区外の畑地へ分布が広がると推測される。形状、規模などの差異から、さまざまな機能をもつものを含むと思われる。そのなかに、中越式土器と石匙がセットで出土した土坑が存在する。中越式土器は、器高が約18cmと小形で、土坑底部付近から、口縁部を斜め上方に向けた状態で出土した。土器内部の土を洗浄した結果、直径0.5～4cmの礫が多量に抽出され、礫を土器に詰めた状態で土坑に埋めた状況がうかがえる。

遺物の集中地点は、竪穴住居跡間に見られる。昨年度は石皿、平石、磨石、くぼみ石に黒曜石の原石・剥片類、石匙、石鏃、石鏃の未製品などが伴う例と、ほぼ伴わない例が認められる点から、前者を石器製作の場、後者を石皿や平石、磨石、凹石を使用する作業の場であったと考えるとともに、集落内部に石器製作の場、作業の場が存在した可能性を指摘した。今年度も本線部分の調査区で、作業の場としての性格をもつ遺物の集中地点が検出された。昨年度と合わせてその位置をみると、集落の東側部分にまとまる点が注目されよう。

第45図　土坑の遺物出土状況

また、その遺物集中地点に隣接した竪穴住居跡2軒から、赤色顔料と思われる粉末が入った中越式土器と、粉末が付着した磨石が出土した。その内、中越式土器が出土した1軒では、南西側の壁コーナーに3点の平石が立てかけられ、覆土でも石皿1点と平石5点が出土するなど、石皿、平石がほかの竪穴住居跡より多くみられる。赤色顔料関係の遺物はほかに存在せず、作業の場に近く、作業の場と共通する石器を多くもった竪穴住居跡から出土した点で、赤色顔料と作業の場との関連や作業の場の性格が気になるところである。

今後に向けて　駒形遺跡の調査はこれで終了となり、県道諏訪茅野線が開通する。それに伴い、周辺部の開発行為が予想されるが、一帯に遺構が広く分布していることは明白であり、それに対して的確な保護措置を施していく必要があろう。

第46図　赤色顔料の粉末が入った中越式土器

(14) 構井・阿弥陀堂遺跡(県道大年線関連)

所在地及び交通案内：茅野市ちの

茅野駅西口から上諏訪方面に徒歩約10分（約600m）

遺跡の立地環境：永明寺山の南麓、茅野市内を東から西に流れる上川の右岸（西岸）。上川が形成した沖積段丘面上の緩やかな斜面に立地する。

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.4.21～11.30	5,000㎡	藤原直人　土屋哲樹

検出遺構

種　類	数	時　期
竪穴住居跡（竪穴状遺構を含む）	37	縄文前期前半6・中期2、弥生後期3、古墳後期3、平安22、中世1
掘立柱建物跡	2	平安～中世
溝	3	弥生～平安
土坑	25	縄文～平安、中・近世
焼土跡	1	中世

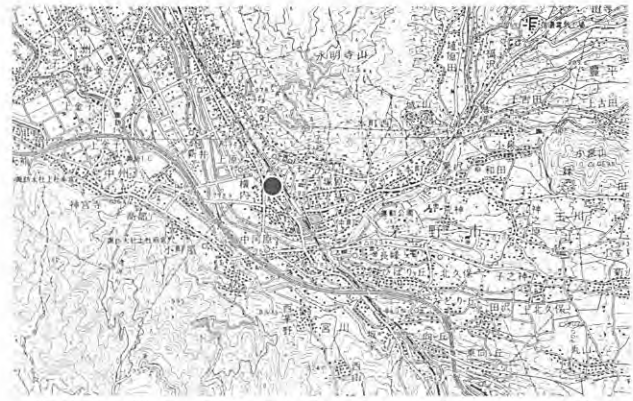
出土遺物

種　類	時期・内容
土器	縄文、弥生、古墳、平安、中世
石器	縄文、弥生、古墳、平安、中世
金属製品	刀子（中世）、宋銭

茅野市街地に広がる複合集落遺跡

構井遺跡と阿弥陀堂遺跡は昭和57年度に茅野有料道路の建設に伴い発掘調査がおこなわれ、弥生時代から平安時代の集落跡が明らかにされている。阿弥陀堂遺跡は、その後も数次にわたって調査され、茅野市教育委員会は構井遺跡と「地形状の大きな変換点は見当たらない」ため、本来は同一遺跡であると見解を示したため、今年度から「構井・阿弥陀堂遺跡(222・223)」と呼称されることになった。

第47図　縄文時代前期前半の住居跡



第48図　構井・阿弥陀堂遺跡の位置（1：100,000）

遺構検出の結果、縄文時代前期前半～中世と長期にわたる複合集落遺跡となった。

縄文時代前期前半の遺跡としては上川上・中流域の高風呂遺跡や駒形遺跡が知られているが、下流域では数少ない。ことに、6軒の竪穴住居跡発見は初めてである。第31号住居跡以外の竪穴住居跡は一部が調査区外におよんでいたため全貌に不明な点がある。SB31は前期前半に特有の地床炉で、周溝が認められるなど、残存状況が良好だった。また、SB21からは木島式土器が半完形で出土し、重複関係がないことから、ほかの一括遺物との共伴関係に興味がもたれるところである。

弥生時代の遺構は、後期の竪穴住居跡3軒と方形周溝墓を1基確認している。それらの遺構は調査区の東側（4・5区）にあることから、微高

第49図　遺跡の遠景（永明寺山を望む）

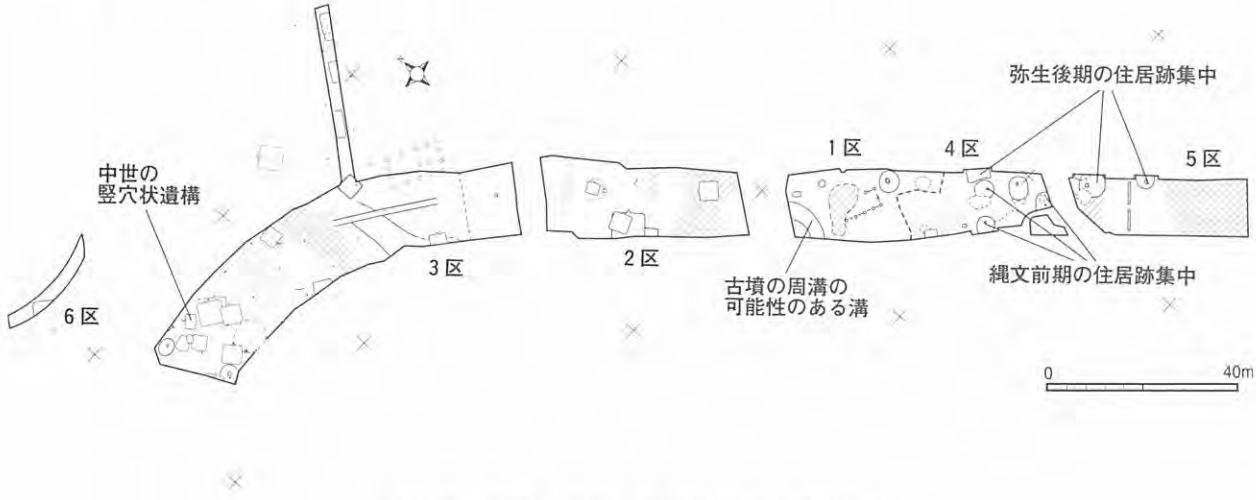
地状の高まりに集落が展開することが考えられる。また、昭和38年、「国鉄官舎敷地」跡地(5区の北側：現在のJR線寄り)では弥生後期の土器が2個体出土しているなど、弥生時代の集落の広がりは北東に広がる可能性を指摘できる。

古墳時代後期では、3軒の竪穴住居跡を検出した。そのうちのSB19は一辺約7mと大形で、遺物の出土量も多い。この時代は永明寺山麓古墳群や上川河床古墳群と集落の関係が問題となっている。該期の遺構は本遺跡周辺でもまれで、昭和57年の構井遺跡の調査で1軒、平成6年の家下(いえした)遺跡の調査で4軒確認されているのみである。古墳構築の母体になったと想定される集団やそれを支えた集落とのかかわりを知る上で、大形住居跡(SB19)の存在は大きいものと考えられる。また、住居跡以外では、1区北西部で古墳の周溝(しゅうこう)と考えられる溝状の遺構が1条検出されている。出土した遺物が土師器(はじき)の小破片であることや、遺構の一部が来年度の現道撤去後でなければ調査不可能であることから、遺構の性格を決めることは現段階では難しい。

奈良時代と平安前期は遺物は出土しているが、平安時代後期にならないと遺構はない。平安時代後期の遺構は全時代の中で一番多く、竪穴住居跡22軒、土坑20基である。ほとんどの住居跡の平面形は隅丸方形、一辺3～5mの規模で、古墳時代後期のSB19のような大形住居跡はない。住居跡内のカマドは北壁に石組みで設けられたものがほとんどで、西壁が2例、南壁は1例認められる。昭和57年の発掘調査報告では、カマドは設置位置について、西風の影響から東壁側に設けられたのではないかと考察されている。しかし、今回の調査結果によると、カマドの設置位置は風向き以外の要因を考えなければならないと考えられる。

第50図　調査中の中世竪穴状遺構

3区北西部の一画からは中世の石積のある竪穴状遺構1軒と土坑が2基検出されている。竪穴状遺構の石積は内側に1.9×1.3mの空間を意識して面取りしたものであることから、石室の可能性が考えられる。近隣の上原城下町との関係も視野に入れて考えなければならない。



第51図　構井・阿弥陀堂遺跡の遺構配置略図

(15) 東高遠武家屋敷跡（国道152号高遠バイパス・県宝旧馬島家住宅庭園整備関連）

所在地及び交通案内：伊那市高遠東高遠

JRバス高遠駅から国道361号線を高遠城跡方面（東）へ1km（徒歩10分）

遺跡の立地環境：高遠城の北側を流れる藤沢川左岸の河岸段丘上

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.9.20～12.7	650㎡	廣田和穂

検出遺構

種　類	数	時　期
建物跡	1	江戸後期～現代
土　坑	5	江戸後期～現代
導水施設	1	江戸後期
池状遺構	1	江戸後期

出土遺物

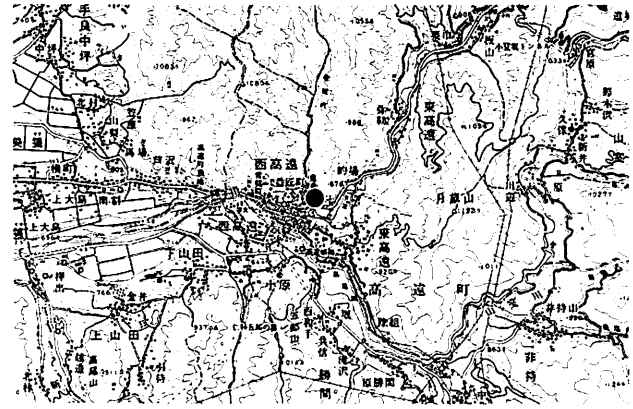
種　類	時期・内容
陶磁器	江戸後期以降
土製品	江戸後期（高遠焼の土管）
金属製品	江戸後期以降（小柄、鉄砲の部品と玉、文久永宝ほか）
石製品	江戸後期以降（石筆、碁石）
木製品	江戸後期以降（将棋の駒、櫛）

高遠藩に仕えた医者の邸宅

東高遠武家屋敷跡は、史跡高遠城跡指定地南東台地上の荒町、板町、久保川及び横町、北西側段丘上の殿町、若宮に広がる。今回の調査範囲は、若宮武家屋敷町の旧馬島家住宅跡である。江戸後期の屋敷割を描いた『高遠藩屋敷割第三図』によると、若宮には8軒の武家屋敷があった。高島藩で代々藩医を勤めていた旧馬島家は、天保7(1836)年に建築とされる建物が現在まで残り、旧高遠藩内に現存する数少ない上級武士の住宅として、平成15年、県宝に指定された。

しかし、道路建設及び庭園整備に伴って、建物を北東へ11.5m曳き移転することになったため、床面が露呈した部分と旧庭園部分について発掘調査をおこなうことになった。

建物部では、硬化面が玄関の土間の範囲を越えて広がるのが確認された。屋敷を建設する前に幅



第52図　東高遠武家屋敷跡の位置（調査地点）（1：100,000）

広く整地が行われたと判断できる。また、礎石とその下に敷く割栗石も検出された。これらは移転前の建物の柱列と一致しており、現建物に伴う構造である。さらに、「いま」の床下はモミを入れた2枚合わせの灯明皿が出土した。類例は江戸時代に多くみられ、地鎮や包衣埋納との関連性が指摘されている。

床下と庭の一部では高遠焼の土管が並んで出土し、何らかの導水施設と推測される。高遠藩では文化11(1814)年以降に土管を生産しており、馬島家の成立年代とも矛盾しない。

庭部では、若宮武家屋敷区画の道から敷地の平坦部まで延びるスロープ状の遺構を検出した。遺構の両側面には石垣が組んであり、建物に通じる通路の可能性がある。成立時期は出土遺物から江戸末期と判断される。更にこの遺構を掘り下げると、武家屋敷区画の道と屋敷地の境界に当たる部分から別の石垣列も検出した。切り合い関係から江戸後期以前に構築された可能性がある。

若宮地区の武家屋敷は、鳥居氏が藩主を勤めていた頃に描かれた『信州高遠古図城主鳥居候』には存在している。元禄(1688～1703)頃までに開発され、馬島家の位置する区画も江戸後期以前に少なくとも2回居住者が変わっている。しかし今回の調査では曳き移転した旧馬島家住宅以前の遺構は確認できなかった。

一方、調査により馬島家の定住以後、敷地内で何回かの造作が行われたことが判明しており、今後の整理作業でその変遷を検討しなければならない。

(16) 箕輪遺跡（国道153号伊那バイパス関連）

所在地及び交通案内：上伊那郡南箕輪村中田
JR北殿駅から北へ1km（徒歩10分）
遺跡の立地環境：天竜川右岸の氾濫原

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.4.13～8.10	4200㎡（一部2面）	河西克造　廣田和穂

検出遺構

種　類	数	時　期
水田跡	1	古代末～中世
溝　跡	3	中世以前1、近世～近代2

出土遺物

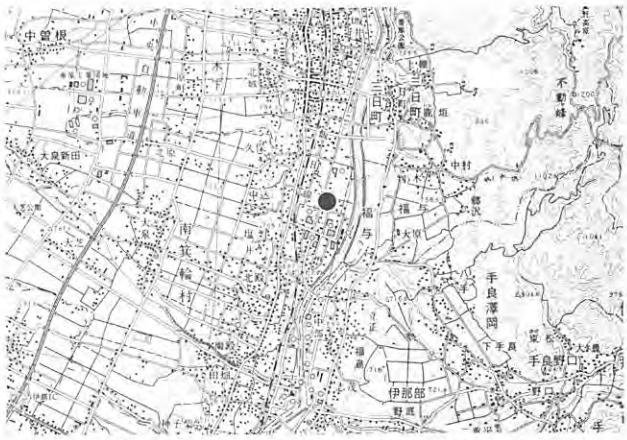
種　類	時期・内容
土　器	古代～中世（土器、須恵器、山茶椀、白磁）、近世～近代（陶磁器）
石　器	縄文（打製石斧）、弥生中期（扁平片刃石斧）
金属製品	近世（キセル、寛永通宝）

古代末～中世の水田跡を発見

箕輪遺跡は、箕輪町から南箕輪村にかけて天竜川右岸の氾濫原に広がる遺跡である。国道153号伊那バイパスに伴う調査として、平成12～16年に箕輪町分の調査・整理を完了し、今年度より南箕輪村分の調査に着手した。本調査区の東側は、平成13年度に発掘がおこなわれており、水田跡と溝が検出されている。今回は、隣接する西側が調査対象となった。

遺構は、南北250mに延びる調査区の北部で検出した。中部と南部は、トレンチ調査をおこなったところ、遺構はない。溝跡は3条検出した。501号溝は、調査区内の谷状地形に沿って流れており、一部に杭列が残存する。幅3m、深さ30cm程で、過年度調査区で検出した部分を合わせると、調査区内を北から南へおよそ300m程蛇行しながら流れることが判明した。出土遺物は近世陶磁器が多いものの、近代以降のものも含んでおり、比較的長期にわたり、存在した可能性がある。

水田跡は1面検出した。調査区北部で、水田土壌化した層（Ⅲ層）を取りのぞいた面で、畦畔状の高まりが確認された（Ⅳ層）。これについて、過年度調査区ではⅣ層からプラントオパールが検出されていないため、Ⅲ層中にあった畦畔の痕跡と理解できるものである。確認された水田一筆は1辺3～5m程で、正方位の小区画水田である。またⅢ層から白磁や山茶碗の破片が出土したため、本水田跡は古代末～中世に耕作されたと判断した。



第53図　箕輪遺跡の位置（1：100,000）

疑似畦畔は過年度調査区でも検出されており、その分布範囲から当該期の水田がかなり広範囲に広がっていたと思われる。箕輪遺跡全体の地形については、比較的南部に河道状低地が連続することが判明しているが、今年度南箕輪村分の調査区でも地区を北西方向に斜めに縦断する形で河道状低地が何本か検出されている。これにより天竜川の氾濫原における土地利用状況がさらに明確となった。今回の調査結果は、いずれも箕輪遺跡南部（箕輪町分）の調査成果を補強するものとなり、遺跡南部にあたる南箕輪村分でも同様の傾向が認められることが明らかになった。

第54図　水田畦畔基部の広がり

(17) 辻原遺跡（一般国道474号飯喬道路関連）

所在地および交通案内：飯田市山本 南平

飯田ICから国道153号を阿智方面に車で15分バスは駒場方面行き中平バス停下車徒歩約10分。

遺跡の立地環境：伊那盆地の南西部、高鳥屋山麓に広がる古期扇状地地形が開析された細長い丘陵に位置する。標高は、625m前後である。

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
H17.4.22～5.31	750㎡	石上周蔵

検出遺構

種　類	数	時　期
土　坑	1	縄文早期～中期

出土遺物

種　類	時期・内容
土　器	縄文深鉢形土器片
石　器	縄文石斧ほか

石子原遺跡と似た石材の石器

今年度の調査は、中央道東側の飯田南ジャンクション(仮)のランプウエイ部分の750㎡が調査の範囲であった。石子原遺跡の約50m南の丘陵に位置し、環境や地形も石子原遺跡と同じである。旧石器・縄文時代の遺構などの検出に期待がもたれた。

辻原遺跡は昭和47年に中央道西宮線、平成13年・14年中央道西側が調査されている。検出遺構は縄文後期の土坑1基のみで、住居址の検出はなかった。今回の調査でも、落とし穴1基のみの検出であり、集落の検出には至らなかった。遺跡の中心は、地形から見て調査区のさらに東側になると考えられる。

第55図　調査区全景（南から）

第56図　辻原遺跡の位置（1：100,000）

出土遺物は、時期不明の縄文土器片と石器である。石器の石材は、硬砂岩、黒曜石、多孔質安山岩、下呂石などである。特に下呂石は、小さな剥片であるが、石子原遺跡との関係をより鮮明に浮かび上がらせる遺物である。石子原遺跡の下呂石は縄文時代早期立野式土器の時期に特徴的にみられる。石子原遺跡では下呂石が、一定量入っており、遺構によっては主体を占めるものもある。

落とし穴遺構とあわせると隣接する石子原遺跡の領域内として一定の役割を担っていたものと考えられる。

第57図　落とし穴遺構

(18) 川路大明神原遺跡（一般国道474号飯喬道路関連）

所在地及び交通案内：飯田市川路

中央自動車道飯田ICからアップルロードを経て国道151号線を下條方面(南)へ13km、25分。JR飯田線天竜峡駅から南東へ約1km。

遺跡の立地環境：飯田市の南端部、天竜川西岸の段丘上に位置する。遺跡の東境は天竜川、南は初沢川の浸食により断ち切られた急崖で、北は下位の段丘面へ下る急斜面となっている。

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
17.8.18～12.2	2,600㎡	若林　卓　白沢勝彦　石上周蔵

検出遺構

種　類	数	時　期
竪穴住居跡	4	縄文中期中葉～後葉3、弥生後期1
土　坑	59	縄文（おとし穴6を含む）

出土遺物

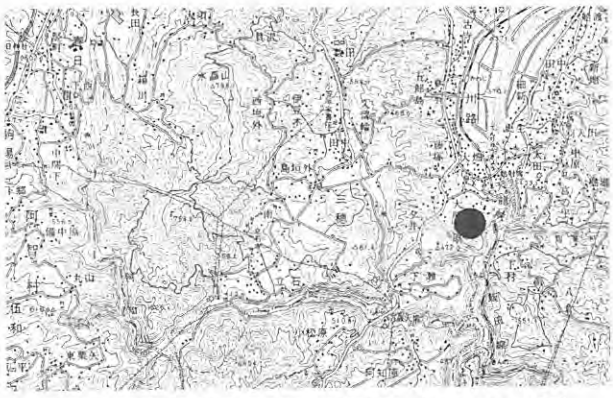
種　類	時期・内容
土　器	縄文中期中葉～後葉、弥生後期
石　器	縄文

縄文時代の集落とおとし穴

遺跡内の地形は、中央の南北方向の谷状低地を挟んで東西で異なる。東部は台地状の地形で、西部は川路丘陵東麓から続く緩傾斜地となっている。平成11年度から発掘調査を進めているが、最終年度にあたる本年度は、東部台地の3ヶ所で面的調査を実施した(8c区・9b区・22区)。

東部台地西縁部の8c区は小面積の発掘区であるが、縄文時代中期中葉から後葉の住居跡と土坑が密集して検出された。土坑は貯蔵穴と思われる円形土坑で、住居分布の間隙に集中して掘り込まれている。一方、中央部にあたる9b区では落とし穴を主体とする土坑が検出された。落とし穴の分布は散漫ではあるが、標高432.3mおよび431.3m前後にまとまる傾向が認められる。

22区は台地西縁部末端から西側の谷状低地部への斜面にあたり、8c区の北北西100mに位置する。市道48号の改良工事に先立って調査をおこない、縄文時代中期の土坑を検出した。飯田市教育委員会の調査で、22区東側の台地頂部には縄文中期後半の住居跡が多数検出されているが、それらは22区には及んでいない。



第58図　川路大明神原遺跡の位置（1：100,000）

本遺跡の縄文時代中期集落は東部台地の西縁部に展開するが、これまでの調査成果を併せると、初頭・中葉段階では、住居1～2軒の小規模小単位の散居形態であったが、後葉へと移行する過程で集落規模の拡大と西縁部北半への集住化が進展していったことが推測される。一方で、台地中央部から天竜川寄りの東縁部や南端部は、恒常的な居住域として利用されることはなく、落とし穴が広く分布している。こうした縄文時代の居住域と狩猟域という、土地利用の異なる2形態が本遺跡の大きな特徴といえる。

7年にわたる調査を通して、当地域における縄文中期集落の動向と縄文時代落とし穴猟の実態を把握するための良好な知見が得られた。なお、本年度は8c区で新たに弥生時代後期の住居跡が確認され、該期の居住活動の一端が捉えられた。

第59図　縄文時代の落とし穴（SK1373）

(19) 竹佐中原遺跡（一般国道474号飯喬道路関連）

所在地及び交通案内：飯田市竹佐

中央自動車道飯田ICから国道153号線阿智方面へ6km。15分。

遺跡の立地環境：高鳥屋山山麓の、古期扇状地が浸食される過程で残った広く平坦な丘陵上(標高612m)。

発掘期間	発掘面積	発掘担当者
H17.4.18～9.3	1,600㎡	若林 卓　鶴田典昭

検出遺構

種　類	数	時　期
遺物集中	2	旧石器

検出遺物

種　類	時期・内容
土　器	縄文
石　器	旧石器

竹佐中原遺跡の旧石器文化

基本土層4層、4'層とした黄褐色土から、旧石器時代の石器集中区を2箇所確認した(C地点、D地点)。両者は約30m離れており、発掘終了時点で、C地点では約390点、D地点では8点の石器群が出土した。また、石器集中区の周辺部には旧石器時代の石器は確認できなかった。

C地点は、直径約9mの中央部に分布密度が薄い環状を呈する分布を示す。また、周縁部には礫群2箇所(SQ01・SH01)と台石と考えられる大形の礫1点が出土した。礫群と台石はほぼ同一面(4層下部～4'層上面)で出土しており、当時の生活面を示すと想定した。大形の石器・剥片はこの面から多数出土し、それより下位にはほとんどない。なお、礫群の礫は割れたものが多く、明確な被熱痕跡は確認されない。礫群に伴う炭化物も確認されない。

礫群を構成する珪質ホルンフェルスを除いた剥片石器群は332点で、その石材組成はホルンフェルス(261点)、緑色凝灰岩(12点)、珪質凝灰岩(21点)、石英岩(37点)、黒曜石(1点)である。ホルンフェルス、珪質凝灰岩では砕片が比較的多く、

第60図　竹佐中原遺跡の位置（1：100,000）

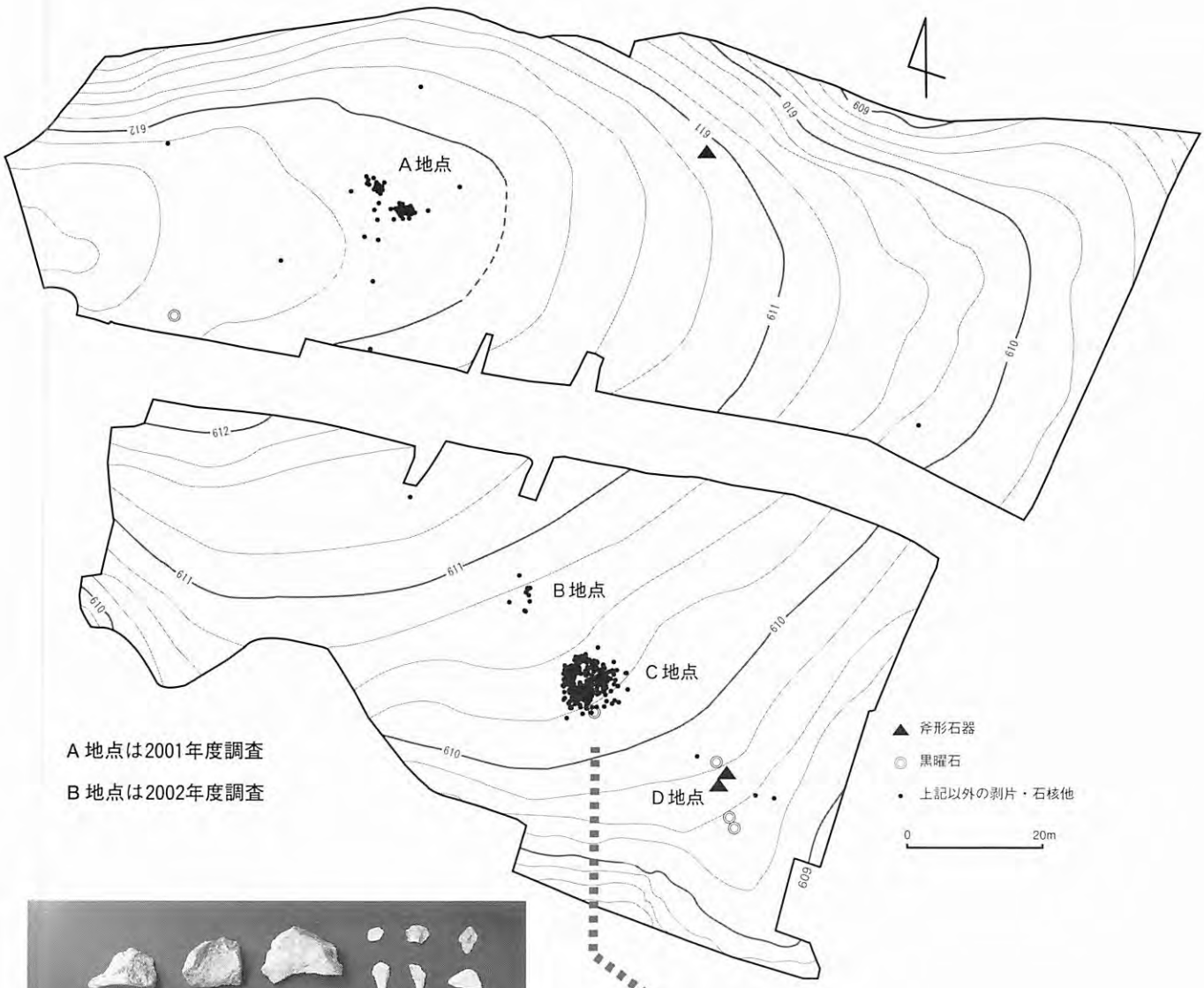
現在、水洗選別したサンプルから砕片の抽出を進めており、前述の点数は暫定的なものである。黒曜石は砕片であり、他の石材と同じ時期の遺物であるかどうか慎重な検討が必要である。

二次加工が認められる剥片と石核を15点確認しているが、ナイフ形石器、台形石器等の意図的に形状を作出する定型的な石器は出土していない。

D地点は、直径12×7mの範囲に斧形石器(千枚岩)2点、砥石(砂岩起源の片麻岩)1点、剥片・砕片5点(緑色凝灰岩2点、黒曜石3点)が出土した。周辺部に石器が出土しないことから、有意なまとまりと判断した。

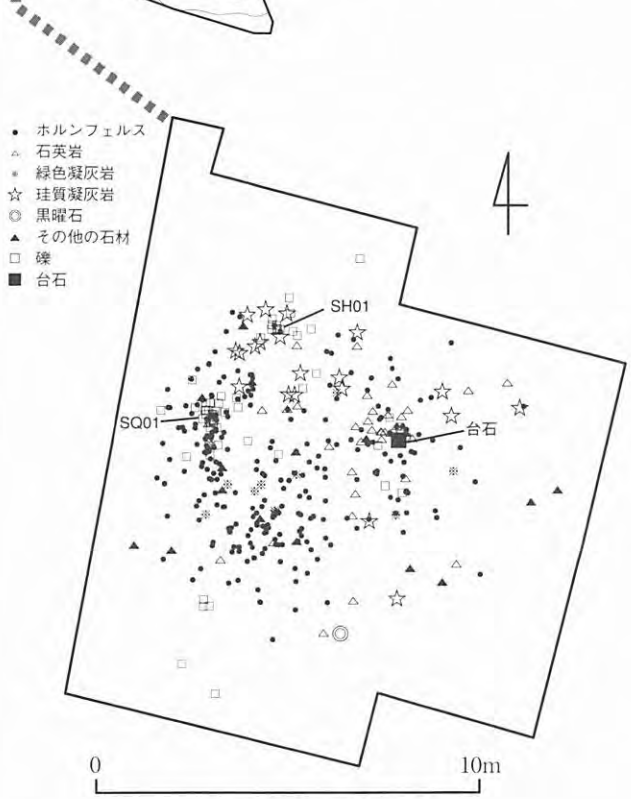
C地点とD地点の石器群の出土層位はいずれも4層を主体としており、層位的に時期差を示す出土状況ではない。しかしながら、両石器群が同じ石器文化に属するものであるかどうかは、慎重に検討する必要がある。また、2001・2002年度に調査されたA·B地点を含めて、各地点の石器群の時間的な関係をどのように捉えるのか、今後の議論の出発点となろう。竹佐中原旧石器文化の内容を明らかにするための、貴重な資料を得た。

第61図　台石と石英岩



C地点の石器

D地点の石器



C地点の石器分布図

第62図　竹佐中原遺跡旧石器時代石器群の分布状況

Ⅱ　整理作業の概要

（1）八幡遺跡群社宮司遺跡　西中曽根遺跡

（国道18号坂城・更埴バイパス建設関連）

八幡遺跡群は、平成15年度から２ヵ年にわたって本格整理を実施してきた。本年は、添付DVDの編集作業を中心に実施し、報告書を刊行する。社宮司遺跡出土の六角木幢は、16年度から保存処理業務に入り、事前分析を終えて、今年より本格的なPEG含浸処理に入った。保存処理業務前に作成した木幢現物のレプリカも10月には完成し、県立歴史館で一般に展示公開した。八幡遺跡群の報告書作成とともに、進めてきた「六角木幢等整理検討委員会」は、３月上旬の検討委員会をもって解散する。

西中曽根遺跡は、遺跡出土の遺物について記録作業を進めた。主な内容は、遺構ごとの遺物接合と、実測用個体の抽出である。

（2）野火附遺跡ほか

（中部横断自動車道建設関連）

平成13～16年度に調査された遺跡のうち、小諸市内に所在する中原遺跡群、野火附遺跡、鎌田原遺跡と野火附城跡の報告書刊行に向けた整理作業をおこなった。

中原遺跡群は６～９世紀の大集落遺跡である。今回の調査地点は口径が20cmを超える須恵器蓋の複数出土が特徴的であり、都の法量による器種分化が、地方でもより直接的に波及した官衙関連かその周辺であることを伺わせる。

野火附遺跡の大溝出土の馬骨は、AMS年代測定で近世という結果が出、牧との関連性は否定された。但し、遺物の整理結果からは、集落がほぼ７世紀一杯で終わって、その直後に１号溝が掘られたことが確かめられた。牧への転換かどうかはともかく、集落の計画廃絶という見方に変更を迫るものではない。

今年度は、これらの遺跡の図版作成・写真図版作成・原稿執筆までおこなった。

（3）駒形遺跡（県道諏訪茅野線建設関連）

駒形遺跡では、土器の接合・復元、拓本、実測作業、石器計測および実測作業をおこなった。

土器は、縄文前期初頭から前葉にかけての良好な資料が多い。注目されるのは、胎土に海綿体骨針と思われる物質を含む土器が存在することである。この時期で海綿体骨針を含むのは、関東地方に分布する下吉井式であり、海綿体骨針を含む素地（粘土）自体、採集地が限られるので、駒形遺跡と周辺地域の交流を直接示す資料といえる。

また、小形石器は黒曜石製が多い中で、石匙とスクレイパー類にはチャート製も一定量が認められる。黒曜石製の小形石器は、石鏃を主体とする様々な製作工程を示す資料が存在するのに対して、チャート製の石器は、ほぼ製品のみが認められる状況である。これは、ほかで製作された石匙、スクレイパー類が、駒形遺跡に持ち込まれた可能性を大きく示していよう。

（4）石子原遺跡ほか

（中央道仮称飯田南JC建設関連）

飯田南JCT関連の遺跡は、平成12年度から17年度まで発掘調査した山本西平、石子原、辻原および赤羽原の４遺跡で、今年度は本格整理作業をおこなってきた。報告書の刊行は来年度を予定している。

整理の中心は石子原遺跡で、縄文時代早期住居址６軒、中期１軒、古墳時代住居址１軒、方形周溝墓４基、江戸時代墓坑31基などが調査されており、縄文時代早期押型文土器・石器と江戸時代の墓壙の良好な資料が得られている。

押型文土器は格子目文土器を中心に山型文、市松文、ネガティブ文などがあり、胎土に多量の長石岩粒を含む立野式土器の特徴を備えている。また、細長い丘陵をすべて掘り、居住領域のあり方を把握することができた数少ない遺跡である。

さらに検討を深め報告書に反映していきたいと考えている。

Ⅲ　普及公開活動の概要

（1）展示会

平成16年度長野県埋蔵文化財センター速報展
「長野県の遺跡発掘2004」

①　歴史館　3月19日（土）～5月8日（日）
来館者8,842名
遺跡調査報告会・講演会　4月10日（日）
「弥生時代における漢文化の影響」
駒澤大学助教授　設楽博己氏
聴講者113名

②　伊那文化会館
7月20日～7月31日（日）　来館者838名
遺跡調査報告会・縄文トーク7月30日（土）
「八ヶ岳山麓の縄文文化をめぐって」
司会：県文化財審議委員　樋口昇一氏
パネラー：茅野市教委　守矢昌文氏・小池岳史氏　埋文センター　寺内・柳澤調査研究員
聴講者107名

写真でみる長野県の遺跡発掘2006
屋代駅市民ギャラリー
2月23日（木）～3月4日（土）

長野県埋蔵文化財センター速報展
「長野県の遺跡発掘2006」
歴史館　平成18年3月18日（土）～
今年度の速報展から、開催年にあわせて題名を変え、「長野県の遺跡発掘2006」とした。
平成17年度に発掘調査と整理を行った遺跡の出土資料や関連遺跡の資料を展示して、県民に埋蔵文化財や長野県の歴史について興味・関心を持ってもらい、センターの事業について理解を得ることを目的としている。

（2）現地説明会

現地説明会に対する市民の関心は、10年ほど前に比べて、薄れてきているように感ずる。竹佐中原遺跡では、3万年を遡る可能性を秘めた石器群を出土状態のまま目の当たりにできるとあって関心を集めた。また、構井・阿弥陀堂や表町は、遺跡周辺の市民向けにコンパクトな説明会とした。

6月4・5日	竹佐中原遺跡	196名
7月16日	竹佐中原遺跡	162名
8月6日	千田遺跡、川久保遺跡	117名
10月23日	構井・阿弥陀堂遺跡	74名
10月29日	表町遺跡	72名
11月19日	西一里塚遺跡	112名

（3）刊行物

報告書2冊と年報、埋文ニュースを刊行した。
・長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書No.77　矢出川遺跡群（南牧村）
・長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書No.78　八幡遺跡群（千曲市）
・長野県埋蔵文化財センター年報21
・長野県埋蔵文化財センターニュース「みすずかる」通巻7～9号

Ⅳ　研修、資料調査等の概要

（1）講師招へいなどによる指導（敬称略）

期　日	指導者	指導内容
17.4.9	駒澤大学文学部 助教授　設楽博己	力石条里遺跡、峯遥坂遺跡等出土の縄文時代晩期末から弥生時代前期の遺物について
4.25～26	明治大学名誉教授 戸沢充則 長野県立歴史館 専門主事　大竹憲昭	竹佐中原遺跡の調査方法及び出土遺物について
5.23～24	明治大学名誉教授 戸沢充則 東北学院大学教授 佐川正敏 東京大学大学院 助教授　佐藤宏之 伊那谷自然友の会 松島信幸 首都大学東京 教授　小野　昭	竹佐中原遺跡等調査指導委員会 竹佐中原遺跡の調査方法及び出土遺物について
5.30	伊那谷自然友の会 松島信幸	竹佐中原遺跡テフラ分析用試料採集及び調査方法
7.4～5	明治大学名誉教授 戸沢充則 長野県立歴史館 専門主事　大竹憲昭	竹佐中原遺跡の調査方法及び出土遺物について
7.12～13	東京大学大学院 助教授　佐藤宏之	竹佐中原遺跡の調査方法及び出土遺物について
7.22	首都大学東京 教授　小野　昭 東北学院大学 教授　佐川正敏	竹佐中原遺跡の調査方法及び出土遺物について
7.29	明治大学名誉教授 戸沢充則	竹佐中原遺跡の調査方法及び出土遺物について
8.9	伊那谷自然友の会 松島信幸 奈良教育大学教授 長友恒人	竹佐中原遺跡の熱ルミネッセンス年代測定およびテフラ分析について
8.10	沼津工業高等専門学校 教授　望月明彦	駒形遺跡出土の黒曜石産地同定について
8.12	辰野高等学校 教諭　百瀬長秀	御社宮司遺跡の畦畔状遺構、竪穴遺構について
8.26	伊那谷自然友の会 松島信幸	御社宮司遺跡の畦畔状遺構、竪穴遺構内の堆積土の性格
12.4	大谷女子大学 教授　藤澤典彦 実践女子大学 教授　武笠朗 国立歴史民俗博物館 教授　井原今朝男	社宮司遺跡出土の六角木幢について
12.20	信州大学理学部 教授　原山　智	竹佐中原遺跡出土石器の石質について（現地）
18.1.20	信州大学理学部 教授　原山　智	竹佐中原遺跡出土石器の石質について
2.18～19	明治大学名誉教授 戸沢充則 東北学院大学 教授　佐川正敏 首都大学東京 教授　小野　昭 長野県立歴史館 専門主事　大竹憲昭	竹佐中原遺跡の調査方法及び出土遺物、今年度の成果と課題等について
2.18～19	奈良教育大学 教授　長友恒人	石子原遺跡の光ルミネッセンス年代測定について
3.2	大谷女子大学 教授　藤澤典彦 実践女子大学 教授　武笠朗 筑波大学芸術学系 教授　澤田正昭 渋谷区松濤美術館 学芸員　矢島　新 奈良文化財研究所 高妻洋成	六角木幢整理検討委員会

（2）研修・視察・資料調査

期　日	視察・調査地	参加者
17.9.28～30	奈良文化財研究所にて「出土漆製品の保存科学課程」を受講	市川隆之
11.9～11	東京大学総合研究博物館にて「学芸員専修コース」を受講	土屋哲樹
11.8～11	奈良文化財研究所にて「遺跡地図情報課程」を受講	鶴田典昭
11.24～12.7	奈良文化財研究所にて「写真基礎課程」を受講	土屋哲樹

期　日	視察・調査地	参加者
12.16 ～17	古代官衙・集落研究会に参加	町田勝則
18.1.28	埋蔵文化財行政研究会で「発掘調査体制の再構築―財団の場合」発表	平林　彰
18.2.1～9	奈良文化財研究所にて「陶磁器調査課程（中世陶磁器）」を受講	中野亮一

（3）全国埋蔵文化財法人連絡協議会等の参加

期　日	会　議　名	開催地	参加者
17.4.22	全国埋蔵文化財法人連絡協議会中部・北陸ブロック連絡会	金沢市	市澤英利 上原　貞
6.10～11	第26回全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会	富山市	仁科松男 廣瀬昭弘
6.30 ～7.1	平成17年度第1回埋蔵文化財担当者等講習会	前橋市	若林　卓
10.20 ～21	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会	北九州市	入沢昌基
10.27 ～28	全国埋蔵文化財法人連絡協議会中部・北陸ブロック連絡会	高山市	平林　彰 山崎勇治
11.1～2	平成17年度関東甲信越静地区埋蔵文化財行政担当者会議	新潟市	上田　真

（4）市町村・関係機関などへの協力

期　日	市町村等	協力・指導内容	協力者
17.5.2011.25	中野市	中野市歴史民俗資料館専門委員会	入沢昌基
6.5	飯田市	山本公民館地区内ウォーキングにおける竹佐中原遺跡の説明	若林　卓 鶴田典昭
6.16	諏訪神事研究会	構井・阿弥陀堂遺跡発掘調査現場見学案内	藤原直人 土屋哲樹
6.18	長野県旧石器文化研究交流会	竹佐中原遺跡発掘調査現場、発掘資料の見学案内	若林　卓 鶴田典昭
6.24	千葉県文化財センター	柏市大松遺跡出土土器の位置付けについて	寺内隆夫
7.5	中野市公民館	千田、川久保遺跡発掘調査現場案内	綿田弘実 柳澤　亮 市川隆之 入沢昌基
7.10	箕輪町	企画展「箕輪遺跡」講演会講師	市川隆之
7.21	長野県	田中知事の竹佐中原遺跡現地見学	若林　卓 鶴田典昭
7.22	群馬県子持村	白井十二遺跡出土縄文時代草創期の遺物の調査・整理法について	廣瀬昭弘
7.24	三郷村	企画展「三角原遺跡から見た平安時代の村」講演会講師	廣田和穂
7.25・28～29	飯田市教育員会飯田市	飯田市文化財審議員、市長、助役、収入役の竹佐中原遺跡現地見学	若林　卓 鶴田典昭
7.28	長野県教育委員会	米沢教育次長の竹佐中原遺跡現地見学	若林　卓 鶴田典昭
7.31	下伊那教育会	阿智村神坂峠遺跡出土陶器について	市川隆之
8月～9月	山ノ内町	佐野遺跡発掘調査に係る調査指導	綿田弘実
8.26	飯田市山本地区自治協議会	竹佐中原遺跡の調査状況の説明	若林　卓 市澤英利
9.3	信州社会科教育研究会上水内支部	川久保、千田遺跡現地見学	柳澤　亮
9.16	群馬県北橘村	縄文学講座「長野県の縄文時代中期の遺跡」講師	寺内隆夫
9.24	県立歴史館	考古学講座「東畑遺跡と犀川流域の縄文文化」講師	柳澤　亮
10.29	県教育委員会	平成17年度市町村埋蔵文化財担当者発掘調査技術研修会　事例発表	市澤英利
10.31	高遠町	史跡高遠城跡内二ノ丸発掘調査指導	河西克造

期　日	市町村等	協力・指導内容	協力者
1.10	長野県考古学会	信濃考古へ千田遺跡の調査概要執筆協力	綿田弘実
2.7	高遠町	史跡高遠城跡出土遺物について指導	市川隆之
2.11	諏訪考古学研究会	諏訪地区遺跡調査研究発表会への資料提供と発表	藤原直人 贄田　明

（5）学校関係への協力・指導

期　日	学校名	協力・指導内容
17.5.19	茅野市立永明中学校	総合的な学習構井・阿弥陀堂遺跡見学　2年生130名
5.26	飯田市立山本小学校	竹佐中原遺跡見学6年生62名
6.13～17	伊那養護学校	現場実習高等部2年生1名
7.21	飯山市立東小	千田遺跡見学6年生17名他20名
8.8	茅野市立金沢小学校	御社宮司遺跡見学5年生10名
8.9～12	中野市立永田小学校	10年経験者研修「異業種体験研修」の受入れ
8.22～26	長野工業高等専門学校	実務訓練環境都市工学科4年生2名
8.29	中野市立永田小学校	川久保・千田遺跡見学6年生19名
8.30	中野高等学校	千田遺跡見学2年生33名
9.15	組合立飯綱中学校	表町遺跡見学
10.5	長野市立豊野東小学校	南曽峯遺跡見学6年生38名
10.6	茅野市立永明中学校	構井・阿弥陀堂遺跡見学・発掘体験：2年生3名
10.16	茅野市立米沢小学校	駒形遺跡見学自律学級児童5名
10.28	小千谷市立吉谷小学校	川久保・千田遺跡見学4年生20名

（6）学会・研修会などでの発表

期　日	内　　容	発表者
17.6.25～26	竹佐中原遺跡の発掘状況をポスターセッションで報告	若林　卓 鶴田典昭
7.2	中世墓資料集成研究会にて長野県の状況について研究発表	河西克造
9.25	信濃国分寺資料館特別展講演会にて「社宮司遺跡出土の六角木幢について」を講演	町田勝則
1.21	信州ふれあい歴史講座「埴輪に込められた心」	土屋哲樹
2.11	諏訪地区遺跡調査研究発表会にて「構井・阿弥陀堂遺跡の調査概要」の発表	藤原直人
1·28	信州ふれあい歴史講座「城を壊すことの意味」「文字資料からみる奈良・平安時代」	河西克造 石上周蔵
2.11	信州ふれあい歴史講座「佐久平における中世的開発」「平安時代の大洪水、その日のヤシロムラ」	入沢昌基 寺内隆夫
3.18	信州ふれあい歴史講座「野火附遺跡と古代の牧」「矢筒城の15世紀後半の村」	上田　真 中野亮一

（7）資料の貸出し

・長野市民新聞：「長野市榎田遺跡出土の鐙」報告書掲載写真
・上田市立信濃国分寺資料館：「千曲市社宮司遺跡出土墨書土器ほか」
・長野県立歴史館：「大町市山の神遺跡写真」「六角木幢組立写真」「六角木幢仏像画像処理写真」
・東京カートグラフィック株式会社：「千曲川流域出土の赤い土器写真」「川田条里遺跡の弥生～奈良時代の水田区画の変遷図」
・株式会社　雄山閣：「三田原遺跡群岩下遺跡全景写真」報告書掲載写真
・東京法令出版株式会社：「竹佐中原遺跡　発掘風景写真」
・ながの農業協同組合：「六角木幢　写真」
・浅間縄文ミュージアム：「野火附遺跡出土石釧」「西一里塚遺跡出土弥生土偶とガラス小玉」
・堀金村教育委員会：三角原遺跡報告書掲載図
・三郷村誌編纂委員会：三角原遺跡報告書掲載写真および図

V　事業・組織の概要

（1）事業（経費は平成18年３月10日現在の契約金額）

事業名			委託事業者	事業個所	事業内容	経費（千円）
受託事業	調査	中部横断自動車道	東日本高速道路㈱ 関東支社	佐久市 西一里塚遺跡ほか	発掘作業 整理作業	97,376
		北陸新幹線	（独）鉄道建設・運輸施設機構北陸新幹線建設局	長野市豊野 南曽峯遺跡ほか	発掘作業	20,162
		国道18号 坂城更埴バイパス	国土交通省 関東地方整備局	千曲市 東條遺跡ほか	発掘作業 整理作業	42,623
		国道20号 坂室バイパス	国土交通省 関東地方整備局	茅野市 御社宮司遺跡	発掘作業	17,517
		中央自動車道西宮線 飯田南 JCT	中日本高速道路㈱ 中部地区	飯田市 辻原遺跡ほか	発掘作業 整理作業	21,501
		国道474号 飯喬道路	国土交通省 中部地方整備局	飯田市 竹佐中原遺跡ほか	発掘作業	62,753
		千曲川替佐築堤	国土交通省 北陸地方整備局	中野市豊津 千田遺跡ほか	発掘作業	182,259
		県道天神バイパス	佐久建設事務所	佐久市望月 天神城跡	発掘作業 整理作業	14,968
		県営畑地帯 総合整備事業	佐久地方事務所 南牧村	南牧村 矢出川遺跡群	発掘作業 整理作業	5,486
		県道大年線	諏訪建設事務所	茅野市 構井・阿弥陀堂遺跡	発掘作業	60,316
		国道153号 伊那バイパス	伊那建設事務所	南箕輪村 箕輪遺跡	発掘作業	20,628
		国道152号 バイパス	伊那建設事務所	高遠町 東高遠武家屋敷	発掘作業	5,974
		県宝旧馬島家住宅跡 庭園整備	高遠町	高遠町 東高遠武家屋敷	発掘作業	3,705
		（主）長野上田線 力石バイパス	千曲建設事務所	千曲市 力石条里遺跡群	発掘作業 整理作業	42,163
		県道長野荒瀬原線	長野建設事務所	飯網町牟礼 表町遺跡ほか	発掘作業 整理作業	28,132
		県道諏訪茅野線	諏訪建設事務所	茅野市 駒形遺跡	発掘作業 整理作業	40,920
	研修	専門的知識技術の習得	県教育委員会		奈文研等での研修	243
自主事業		速報展	７月：長野県伊那文化会館 ２月：屋代市民ギャラリー　３月：長野県立歴史館			0
合計		18事業				666,726

（2）組織

財団法人長野県文化振興事業団

【役員】　9名

理事長　長野県副知事
副理事長　県民文化会館長
理事　信濃美術館長　県芸術文化協会会長　学識経験者
監事　2名

- 事務局　3名
- 埋蔵文化財センター　33名
  - 所　長
  - 副所長（兼管理部長）
    - 管理部　5名
      - 管理部長　部長補佐　職員　臨職
    - 調査部　27名
      - 調査部長
        - 調査第1課　14名
          - 課長　主任調査研究員
          - 調査研究員　臨職
        - 調査第2課　12名
          - 課長　調査研究員
- 県民文化会館　17名
- 伊那文化会館　15名
- 松本文化会館　17名
- 信濃美術館　22名
- 飯田創造館　6名
- 佐久創造館　5名

（3）職員（臨時職員を除く）　平成18年3月10日現在

所　長		仁科松男
副所長		根岸誠司
管理部	管理部長	根岸誠司
	管理部長補佐	上原　貞
	職員	山崎勇治　藤森富士子
調査部	調査部長	市澤英利
	調査課長	廣瀬昭弘（第1課）　平林　彰（第2課）
	主任調査研究員	綿田弘実（第1課）
	調査研究員	久保光男　寺内隆夫　上田　真　白沢勝彦　市川隆之　中野亮一　桜井秀雄　西　香子　入沢昌基　柳澤　亮　山崎まゆみ〔以上第1課〕 小林秀行　石上周蔵　町田勝則　河西克造　若林　卓　藤原直人　鶴田典昭　廣田和穂　市川桂子　贄田　明　土屋哲樹〔以上第2課〕

～付　編～

縄文トーク

八ヶ岳西麓の縄文文化をめぐって

司会：樋口昇一　県文化財保護審議会委員

パネラー：守矢昌文　茅野市教育委員会文化財課
小池岳史　茅野市教育委員会文化財課
寺内隆夫　県埋蔵文化財センター
柳澤　亮　県埋蔵文化財センター

2005年７月30日（日）

長野県伊那文化会館

調査部長　これから「縄文トーク」を始めるわけですけれども、まず、縄文集落に関わるさまざまな研究課題や問題点を引き出して、「縄文トーク」をおおいに盛り上げていただく、今日の司会者をご紹介します。

樋口昇一先生でございます。

樋口先生は、埋文センターに在職していらっしゃったご経歴があります。もともとは、東京のご出身なんですが、長野県の考古学発展の草分け的存在でして、大学をご卒業以来、ずっと信州でご活躍されてきました。私も、先生にお世話になってきたひとりです。高校の先生をやられ、信州大学の教育学部でも講義をしてらっしゃいました。いま、信州で活躍されている考古学研究者のなかには、先生の影響を受けてこの世界に入ってきた人がたくさんいらっしゃいます。また、『長野県史』（長野県1981）とか『日本の古代遺跡』（樋口ほか　1996）など、多くの本を執筆、編集されています。

今回の「縄文トーク」は、八ヶ岳西麓の縄文集落、具体的には聖石遺跡、長峯遺跡を中心とした茅野市域の縄文遺跡に関わる問題について、一般の方がたに、わかりやすく理解していただく機会にしたいという趣旨で計画しました。樋口先生には、私どもの趣旨にご賛同いただき、快くこれを引き受けてくださいました。

つぎに、パネラーの皆さんをご紹介しましょう。向かって左側から守矢昌文先生、そして小池岳史先生です。おふたりは茅野市教育委員会文化財課で、茅野市の埋蔵文化財に関わる企画、調整にあたっていらっしゃいます。「縄文のビーナス」とか「仮面の女神」とか、じつに重要な考古資料を発掘したほか、茅野市内の遺跡調査に関わっていて、多くの情報をお持ちです。

さきほど遺跡発表会でも報告がありました聖石遺跡、長峯遺跡とそれ以外の縄文遺跡を対比しながら、縄文集落に関わるいろいろな話を、情報を出していただけると

写真１　樋口昇一氏（長野県文化財保護審議会委員）

写真２　縄文トークのパネラー　左から守矢昌文氏、小池岳史氏（茅野市教育委員会）、寺内隆夫、柳澤　亮（埋文センター）

いうことでお願いをいたしました。

寺内隆夫、柳澤亮の両名は、埋文センターの調査研究員です。聖石遺跡、長峯遺跡を調査し、整理し、まとめてきた者でございます。

以上４人のパネラー、そして樋口先生の司会で、八ヶ岳西麓におきます縄文文化の素晴らしさ、凄さの一端を、お集まりの皆さま方と共有できればと思います。

それでは樋口先生、よろしくお願いいたします。

■長峯遺跡の歴史と宮坂英弐

樋口昇一　今日はわずかな時間ですが、皆さんと縄文時代の世界をかいま見ることができればと思います。こういう催しは非常に少ないんじゃあないかと思うんですが、主催者の趣旨説明にもありましたとおり、皆さん気楽にお聞きください。また、一番最後の方で質問の時間も設けますんで、わからないことがあったら、どんどん、どんどん遠慮なく手を上げて質問をしていただきたいと思います。

正直に申しますと、私たち５人で、私の家で、今日のために打ち合わせをしまして、「じゃあ、ここはこういう風にしようか。ああいう風にしようかと」ってなことを、２時間半ほど話し合ったんです。今日はその時のメモを持ってきたつもりでしたが、ないんです（笑）。やはり、近ごろ若い者たちから言われているように、認知症が始まってきたようでございまして（笑）、今日もどうなるか、ちょっと心配です。まあ、なんとか時間内で、皆さんにわかりやすく縄文の世界を理解していただけるように頑張っていきたいと思います。

皆さんもご存知のように、この八ヶ岳の西麓あるいは西南麓というのは、今日もこの会場にお見えになってい

る、明治大学の前学長であられる戸沢先生が、「縄文王国」という名前で発表していただいたし、あるいは「井戸尻文化」という言葉をつくって学会で発表していただいたんですが、それがいまではもう、私たちの常套句として使われています。この「縄文トーク」の前に柳澤さんによって、長峯遺跡と聖石遺跡の報告がありましたから、遺跡個々の内容は理解していただけたんじゃないかなあと思うんです。

今日は始めに、皆さんにちょっとショックを与えるようなことをやろうじゃないかと思って。ご覧ください。ステージの前に、有孔鍔付土器が並んでおります。すでに、報告のなかで柳澤さんが40年前の土器が接合したことをバラしちゃったんですが、打ち合わせでは、この「縄文トーク」のオープニングで皆さんにお見せする予定だったんですよ（苦笑）。彼、ちょっとオーバーランして、そのことを話しちゃったから盛り上がらなくなっちゃったんですが・・・。

じつは40年前、あの尖石の主、宮坂英弐先生が掘り出した土器が、40年を経て、埋文センターが掘った土器とドッキングしたわけです。いま、宇宙でもやってますね。それとまったく同じようなことを、いま、ここでお見せしますんで。

寺内さんと柳澤さん、ふたつの土器がどこにどう付くのか、ちょっとお見せ願いたいと思います。

寺内隆夫　じつはですね、「縄文トーク」が始まる前の休み時間中にリハーサルをやって、前の方には見せちゃいました（笑）。どうでしょう。客席の皆さん、全体にステージの方に近づいて来てもらってもいいですか。

向かって左側の土器は、尖石縄文考古館に行かれた方はご存知かと思いますけれども、奥の方に、いわば鎮座ましましている土器です。長峯遺跡が全国的に非常に

写真３　有孔鍔付土器をみつめる聴衆の皆さん

写真４　40年のときを越えた土器片の遭遇

有名になったのは、この有孔鍔付土器―有孔鍔付土器という名前は、土器の縁のすぐ下を鍔が巡っていて、そこに孔が空いているため付いたんですが―ともうひとつ、あとから出てきます阿玉台式土器というような深鉢形の土器が、昭和34（1959）年に掘り出されたためです。つまり、この土器がなければ今回の私たちの調査もなかったというわけです。とくに謂れのないふたつの土器が付いただけならば、まったく大した話ではないんですけれども、長峯遺跡を世に知らしめるきっかけとなった土器が、今回、私たちが発掘した破片とくっついたという点に、非常に大きな意味があるわけです。

もっとも、私たちはふたつが接合することになかなか気がつきませんでした。この破片の実測図を描いている補助員さんが、尖石縄文考古館へ行ったときに「この展示してある土器は、いま、実測している破片と付くんじゃないですか。」というひとことから始まりました。あとから聞きますと、この破片を復元していた補助員さんたちも、私たちとは別に尖石縄文考古館へ見学に行って、「あれ、付くよ。」というような話をしていたようです。そんな話題が漏れ伝わってきた時に、私たちは「本当かなあ？」と最初はマユツバだったんですけれども、どうみても似ている。比較してもらってわかるようにこの割れ口ですね。それから、このクローバーといいますか、模様の部分が、一目みてそっくりだというのがわかるかと思います。

尖石縄文考古館の展示室では、みた目のいい方が表側に出ているんでわからないんです。反対側は石膏で復元してあります。その部分に、この破片がちょうどピタッと嵌ります。破片のこの赤い色―ベンガラ―で塗ってある部分が、こちらの復元してある土器にみえるこの筋です。ここにピタッときます。これだけ失われた部分がありますと、復元するのは非常に難しいんですけれども、

復元した模様さえもあとから出てきた実物とほとんど変わらないわけで、40年前に復元した方のセンスのよさがうかがえます。残念ながら、どなたが復元したのか確認がとれていないんですけれども・・・。

土器の表面に黒と赤の着色があります。黒は漆のようです。一度、黒漆を全面に塗って、その上に赤で彩色といいますか、模様を描いていたようです。いまでは、それがだいぶ剥げ落ちてしまって、どんな模様が描かれていたかわからないんですけれども・・・。尖石縄文考古館には、土器の表面を黒塗りして赤漆で彩色した土器の複製品が飾ってありますね。皆さん、考古館へ行く機会がありましたら、縄文時代にはああいう土器だったんだということを実感していただければと思います。

樋口　私たちも長いあいだ考古学をやってますが、こういうことはめったにありません。たぶん、これは宮坂英弐先生が、こういうドッキングの機会を私たちに与えてくださったのではないかと思って感謝しております。

有孔鍔付土器については、皆さんご存知のように、酒をつくった道具であるという説が専らだったんですが、いまでは太鼓であるという説も非常に有力になってきまして、両者ともに相譲らずという形で、学会のなかで問題視されている土器でございます。

もう少しお話しておきますと、こういう土器は、ひとつの遺跡を掘ってたくさん出る土器ではありません。釣手土器だとか香炉形土器と同じように、数個あるいは1個しか出ない場合が多いわけです。

今回の聖石遺跡では有孔鍔付土器は、どのくらい出ましたか？

柳澤　亮　非常に少ないです。長峯遺跡では、いま紹介したようなダルマさんといいますか、そういう形ばかりではなくて、いろいろな形態の有孔鍔付土器がみつかっております。たとえば、竹を割ったような形の高さ10cmほどの有孔鍔付土器もみつかっておりますし、大きな樽のような形をした土器もありまして、非常にバラエティーに富んでいます。

全部で10数個体でしょうか。

樋口　そんなにたくさんありましたか。守矢さんや小池さんどうですか？茅野市あたりの中期の遺跡で、やはりそんなにたくさんは出ませんよね？

守矢昌文　そうですね。数の多い遺跡もありますけれども。たとえば、「縄文のビーナス」が出た棚畑遺跡なんかでは、まとまった数が出ています。けれども、小さな遺跡からはほとんど出ません。

写真5　縄文のビーナス（茅野市尖石縄文考古館）

樋口　なるほど。ところで、今度の聖石遺跡、長峯遺跡の調査で、宮坂英弐先生が調査した時代のことが再確認されたという事例は有孔鍔付土器だけではないようですね。竪穴住居跡の炉石の抜き取りの跡がありましたよね？これについて、ちょっと話をしてもらえますか。

柳澤　はい。今回の調査で、宮坂先生が昭和30年代に調査した跡ではないかなあと感じた部分をご紹介します。

写真6は、昭和11（1936）年の尖石遺跡の調査風景です。奥の方に写っているのが宮坂先生です。当時の調査というのは、いまのように、面を全部広げて、隈なく調査するというものでは

写真6　宮坂英弐氏と尖石遺跡（茅野市尖石縄文考古館）

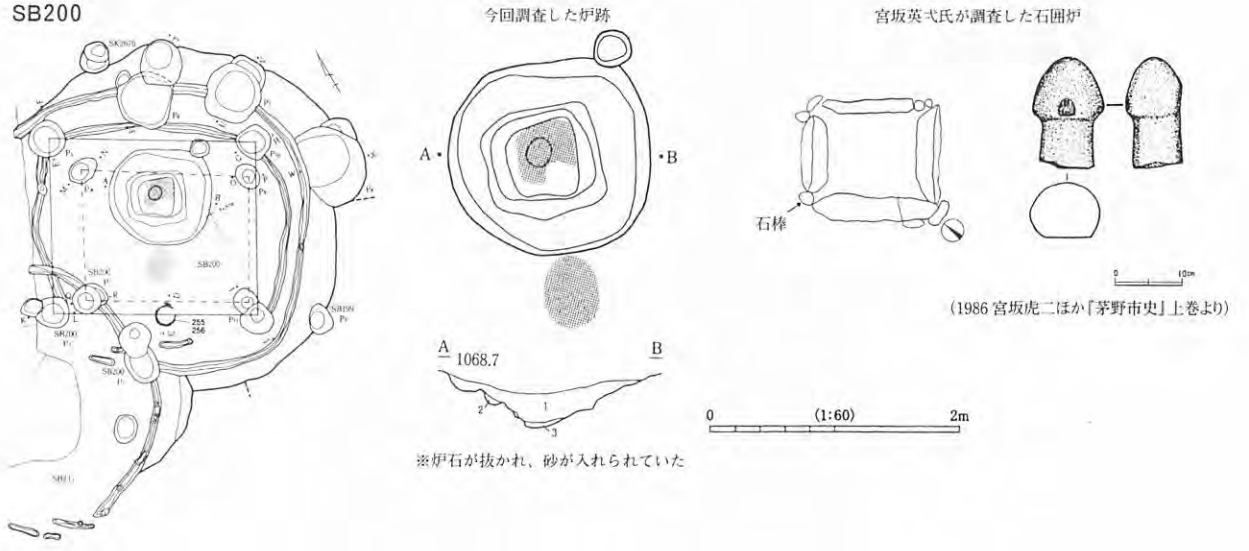


図1　長峯遺跡第200号住居跡　今回調査した炉跡（中）と宮坂氏が調査した石囲い炉
（長野県埋蔵文化財センター　2005）

ありません。トレンチを掘って、そのなかで住居跡の炉をみつけては、その周りを広げて調査していく。それで、住居の性格をつかんでいく、というような方法を採っていたわけです。

宮坂先生が、長峰遺跡で有孔鍔付土器などを発掘された時のようすを記されているものをみますと、季節は冬だったようです。長峯遺跡の台地で土木工事がおこなわれて、たくさん土器が出てくるぞ、という情報があったときに、2日間くらい調査をしたようです。その時、石囲いの炉が発見されたと。図1に「宮坂英弐氏が調査した石囲い炉」というのがあります。左に有頭の石棒がございますけれども、それが炉の一画に据えられた炉が紹介されております。

竪穴住居跡のなかでも、炉というのは非常に慎重に調査していきます。写真7の住居跡は周りに壁がありまして、埋甕も手前側でみつかっております。そして、住居の中心部に注意してください。いままでの調査事例をみますと、縄文人が炉を解体して石を抜いてしまうという例はいくつかありましたけれども、この場合はどうもそうじゃなくて、炉があった場所を砂で埋めている。流れ込んだ砂ではなくて、川砂のような非常にきめの揃ったもので埋められていて、砂を取り除いていくと、あたかも発掘調査したような形にみつかってきております。

写真7　長峯遺跡第200号住居跡

これは変だなあ、前にだれか掘ったのかなあ、というような印象で調査していたんです。その後ですね、図1の宮坂先生の実測図と位置や方向を合わせてみますと、先生は、この炉の石囲いの部分だけを調査されて、それを『日本考古学年報』（宮坂英弐　1964）に紹介されたんじゃないかという所見を得ました。

有孔鍔付土器のように、ぴったり合わせてみることはできませんでしたが、「掘っている人間だからわかる。」といったらおかしいんですけれど、たしかに、だれかが前に掘っているなあ、という印象が強く残っている住居跡だったんです。冬期間だったので、炉は調査したけれども、埋甕までは手が回らなかったのでしょうか。まったく手つかずの状態だったわけです。

尖石縄文考古館の鵜飼幸雄館長さんに、宮坂先生のメモが残っていないかお聞きしたところ、先生が調査された当時の地主さんがお持ちになっている畑が、今回調査した地点のすぐ隣くらいの場所である、というメモが残されていたこともわかりました。

樋口　発掘をやっているとこういうこともあるんですね。宮坂先生という偉大な大先輩が、本当に貧しい生活のなかでこういう風に掘っていたんですが。

守矢さんどうですか？ほかの遺跡でも、宮坂先生の

写真８　史跡尖石遺跡の発掘調査（茅野市尖石縄文考古館）

掘った跡だぞ、というような発見がありましたか？

守矢　宮坂先生が生涯をかけて調査いたしておりました尖石（とがりいし）遺跡ですけれども、いま、ちょうど史跡整備ということで、もう一度先生の発掘を再確認するという調査をおこなっております。そのなかでいくつかですね、先生がお掘りになった住居跡を私どもが確認する、というような仕事をさせていただいているわけです。

たとえば、昨年は、宮坂先生が調査されたと同じ地点を掘りました。そこでは、宮坂先生が調査された当時のまま、大きな穴が発見されまして、石も抜かずにちゃんと置いてあった、というような状況が確認されました。

また、写真８にみえる配石ですね。横一列に石が並んでいる状態。左側の写真は、むかし宮坂先生が調査されたときに撮影されたものです。右側は、最近の調査で私たちの目の前に再びあらわれた配石（はいせき）です。いまの調査でしたら、石の出土状態を記録に残したあと、石そのものは捨ててしまうんですけれども、宮坂先生は原位置のまま置いておいた、保存されていた、という状況が最近の調査で確認されております。

樋口　めったにこういうことはないんですよね。いまは調査が終われば、ダメ押しといって重機で全部崩してしまいますからね。

長野県は縄文中期の宝庫だといわれながら、正直いってわれわれの力が足りなくて、ほとんどが破壊されてしまっているわけです。なんとか遺跡を残したいなあと思いながらも、なかなかできない。それを、宮坂先生はあとの連中がみてもわかるように残してくれていた、というのは非常に素晴らしい。先生の学問に対する態度が良く出ているんじゃないか、と感心させられるわけでございます。

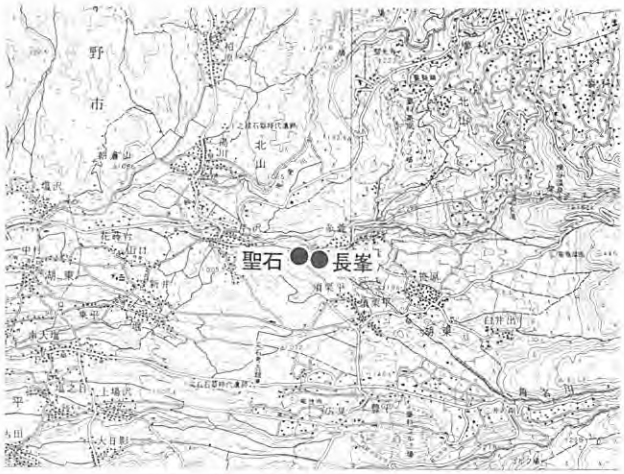


図２　聖石遺跡　長峯遺跡の位置

■聖石と長峯の環状集落

樋口　縄文中期の遺跡を考える上で、一番大切なテーマは何かというと、それは集落、すなわち縄文人のムラを解明することだと思うわけですが、日本で初めて縄文時代の集落を掘ったというのが、尖石遺跡だったわけですね。宮坂先生の大きな功績のひとつだったわけです。

さきほどの柳澤さんの話では、ふたつの環状集落が同じ台地の中にある。それは、はじめひとつだったのが、どうやら動くような感じがある。そして、別々の環状集落から出た石器がつながる、ということもあったようです。そこで、そういう集落の実態はどういうものなのだろうかということを、ここでお聞きしてみたいと思うのですが。

柳澤　図3は、私がさきほどから紹介している聖石遺跡、長峯遺跡の遺構全体図を縮小して、各時期の遺構分布の変遷をみることができるように並べたものです。

今回の調査では、およそ10万点の土器片が出土しています。一緒に整理作業をしてきた寺内さんは、これらの土器を全部調べています。何のために調べたのかといいますと、私どもが掘った穴だとか、住居跡の「時期」を知りたいからなのです。環状集落と一口にいいますが、一気にでき上がったわけではありません。500年くらいのゆったりとした時間のなかで、最終的にああいう形になるわけです。私たちはたった数年間で掘ってしまいますので、あの台地に350軒の竪穴住居が林立していた、いまの北山集落よりも人口が多かったのかと錯覚してしまいがちですが、実際はそうではなくて、長い長い年月をかけて、竪穴住居を掘っては埋まり、掘っては埋まり、またそこに土器を捨てたり、ということを台地の上で繰り返していた結果であるということです。

出てきた土器や住居跡の形とかを丹念に観察していきますと、どうも時期ごとに変化があることがわかりました。時間の経過を加味しながら、台地の上でどのように人びとがムラを形づくっていったのかという点を表したのが図3です。台地をうまく利用しながら変遷していたようすがわかると思います。

聖石遺跡、長峯遺跡を具体的にみていきますと、縄文時代早期くらいの時期の落とし穴が、たくさんみつかっております。このころは、まだ人が暮らした痕跡がみつかっておりません。居住施設と思われる住居跡は、一番古いところで中期前葉です。長峯遺跡から発見されました。長峯遺跡では、中期中葉に向けて徐々に環状集落を形づくるようになっていきますが、聖石遺跡の方にはまだ住居跡は出てきておりません。中期後葉1期になって、初めて聖石遺跡の方でも4軒の竪穴住居がみつかってきています。中期後葉3期には複数の住居が並存し、だんだんと環状に分かれていきます。

ところが、中期終末から後期初頭になりますと、徐々にまた解体いくわけです。最終的に聖石遺跡、長峯遺跡の人たちはどこに行ってしまうのかなあというと、後期前葉2期という時代、寒冷化してきたのではないかといわれている時期になりますと、台地の斜面部に敷石住居という特徴的な建物を、わざわざ地形を改変しながらつくって暮らしていくようになるわけです。

樋口　皆さんどうですか。皆さんがみている図というのは最終的な局面なんですね。ですから、住居跡がごちゃごちゃあってスゴイなあと思うけれども、時間的な流れのなかでみていくと、こういう風な形で細かく分かれていくわけですね。

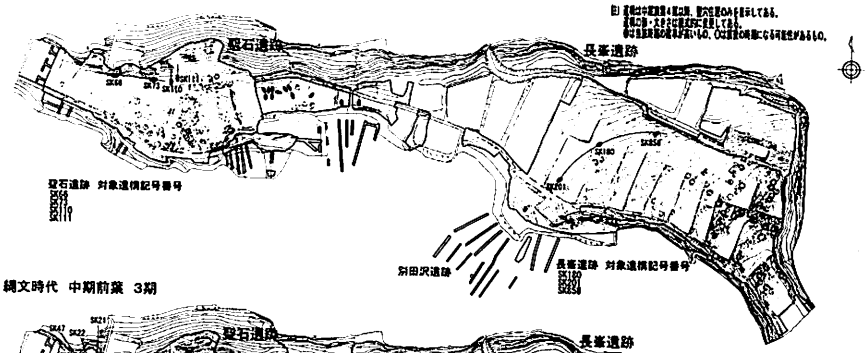
あるときは、5軒くらいしかないし、10軒くらいしかないというときもありまして、それが数百年間続くわけです。そして最終的に環状集落という結果が出てくるわけです。私がいつも思うのは、数百年間続いているにもかかわらず、真中には絶対に家をつくらない、空白にしておくという感覚ですね。縄文人たちの慣習というんですか、習慣というんですか、それが守られているというところに不思議さを感じるんですよ。彼らにとって、いかにそこが神聖な場所であるのか。だからその周りからヒスイや何かが出てくるようなお墓なんかが出てくるのではないかと思うのですが。

皆さんも、聖石遺跡、長峯遺跡というのがどういう遺跡かということはおわかりになったと思うんですが、こうした「環状集落」というのは、聖石遺跡と長峯遺跡だけだったのかというと、どうもそうじゃないんですね。茅野市ではどうですか。どのくらい環状集落がわかっていますか。

小池岳史　霧ケ峰南麓というのは、後ろ側(北側)に霧ケ峰が控えておりまして、その南側に遺跡が広がっています。霧ケ峰からは、横川川ですとか、桧沢川、前島川、藤原川というような河川が流れ下っています。遺跡は、そういう川が形成しました扇状地に立地するものがあります。それと「縄文のビーナス」で有名な棚畑遺跡、上の平遺跡などのように、台地の張り出し部分、

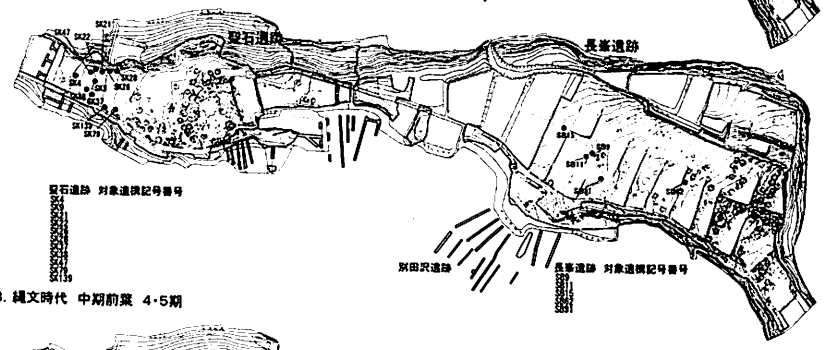
台地の利用開始

1. 縄文時代 早期～初頭 （時期不明 おとし穴）



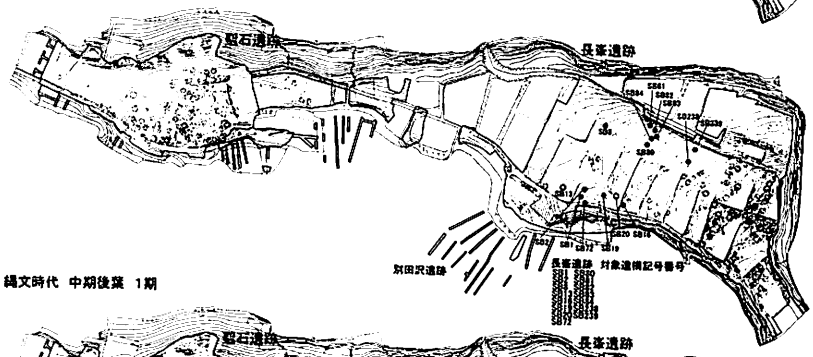
集落の成立

2. 縄文時代 中期前葉 3期



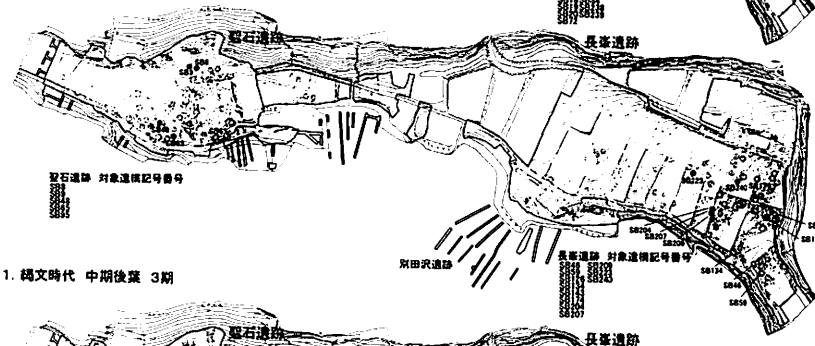
長峯で集落定着

3. 縄文時代 中期前葉 4・5期



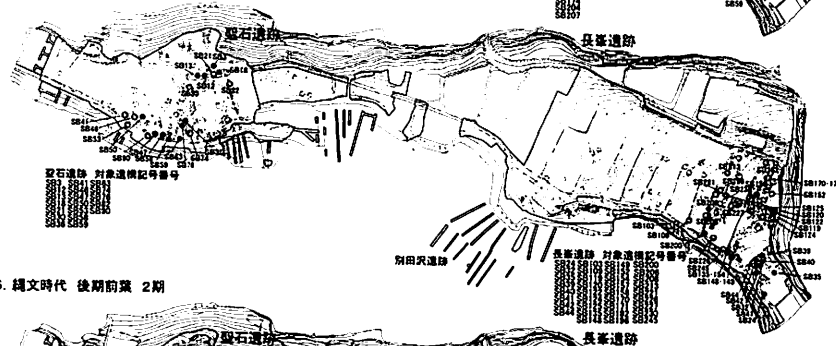
聖石で集落成立
―2集落併存時代へ

9. 縄文時代 中期後葉 1期



聖石で南西側への
集落拡大

11. 縄文時代 中期後葉 3期



竪穴住居の南側斜面部・
低地利用へ

16. 縄文時代 後期前葉 2期

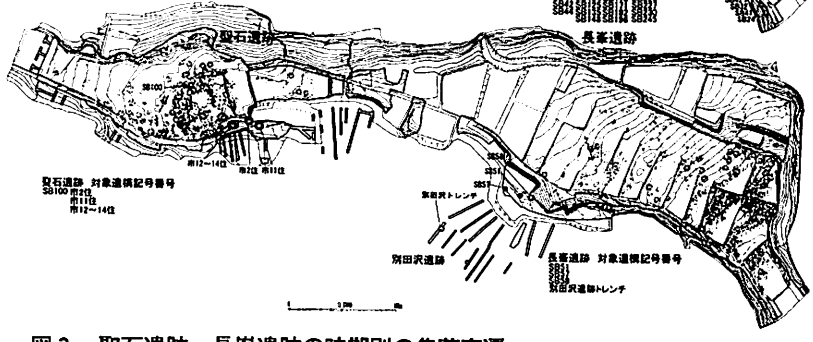


図3 聖石遺跡、長峯遺跡の時期別の集落変遷

図４　霧ヶ峰南麓の縄文中期遺跡（茅野市教育委員会）

というのもありまして、これも環状になる可能性があります。また、立石遺跡も環状になる可能性もあるんですけれども、残念ながら全面調査されていないので不明です。

聖石遺跡、長峯遺跡の場合は、同じ台地上の、しかも500ｍしか離れていない至近距離に、ふたつの環状集落が並存していたわけですが、霧ヶ峰南麓の遺跡に関していえば、中期後葉の環状集落、または環状集落になると考えられる拠点的集落―ある地域で中核になるような遺跡―というのは、１km程度の距離をもって展開しているようです。しかも、河川の一番末端部分を押さえるような、非常にいい場所に拠点集落がつくられているという特徴があります。さきほど、紹介しました八ヶ岳西麓でも、近接する遺跡というのもあるんですけれども、環状集落あるいは地域の拠点となるような遺跡というのは、やはり、ある程度の距離をもって点在するということがわかります。

テラス状に張り出した部分に立地するという遺跡もあります。

図４の遺跡が、霧ケ峰南麓で「拠点」とみられる遺跡です。今回、ちょっと黒っぽい網掛けをしました。いずれも中期後葉、ちょうど聖石遺跡と長峯遺跡に環状集落ができる時期ですね。その時期に「拠点」になったと思われる遺跡です。

個々の遺跡をみていきますと、まず上の平遺跡が環状集落と思われます。一ノ瀬・芝ノ木遺跡も、中期後葉には環状集落と思われるようなムラの形をしております。駒形遺跡は、国の史跡ということで開発が一切できません。ただ、学術調査が部分的におこなわれているものですから、その結果から判断して環状になる可能性もあるということです。大桜遺跡はやはり中期後葉の環状集落になります。棚畑遺跡も環状集落になっておりまして、報告書のなかでは環がふたつ、メガネのようにくっついて、双環状なんていう風にもいわれているものです。

ここまで紹介した遺跡の南側には上川が流れていますが、その対岸に県宝に指定されました「仮面の女神」で有名な中ツ原遺跡があります。地形区分では、八ヶ岳から西側へ放射状に張り出した台地上に遺跡が展開するという地域になります。この中ツ原遺跡も中期後葉の住居跡が環状にめぐる遺跡です。この台地上には新井下遺跡

樋口　茅野市の旧山村地方ですが、ここから富士見町の井戸尻遺跡の方へ、八ヶ岳の西南麓の方へ行っても同じような状況が続きます。縄文中期というのが、いかに凄い時代であったかということは、皆さんにもわかっていただけるんじゃないかと思います。

守矢　さきほど柳澤さんから集落の変遷に関わる話が出ましたが、環状集落の研究の元というのはやはり尖石遺跡です。尖石の北側に与助尾根という遺跡がございますけれども、この両者の関係も聖石遺跡、長峯遺跡と同様なことがいえます。

尖石には、縄文時代中期中葉にはすでに竪穴住居跡が造られていますけれども、与助尾根にはない。中期後半

写真９　与助尾根遺跡の縄文集落
（茅野市尖石縄文考古館）

なると、住居が尖石から与助尾根に動いてくると昔から集落研究のなかでは解釈されていると思います。

聖石遺跡、長峯遺跡の場合につきましては、同一の台地上で500m離れているということでございますけれども、尖石遺跡と与助尾根遺跡は浅い谷を隔てて隣接しています。その隣接する台地間で、遺跡がどういう風な形で動いたかということを模式的に表しているのが図５であります。尖石遺跡は大きな馬蹄形集落で、300軒クラスの集落だといわれておりますけれども、各時代を細かくみていきますと、数軒単位に推移しています。それが中期後半になると与助尾根、つまり隣の台地に移って

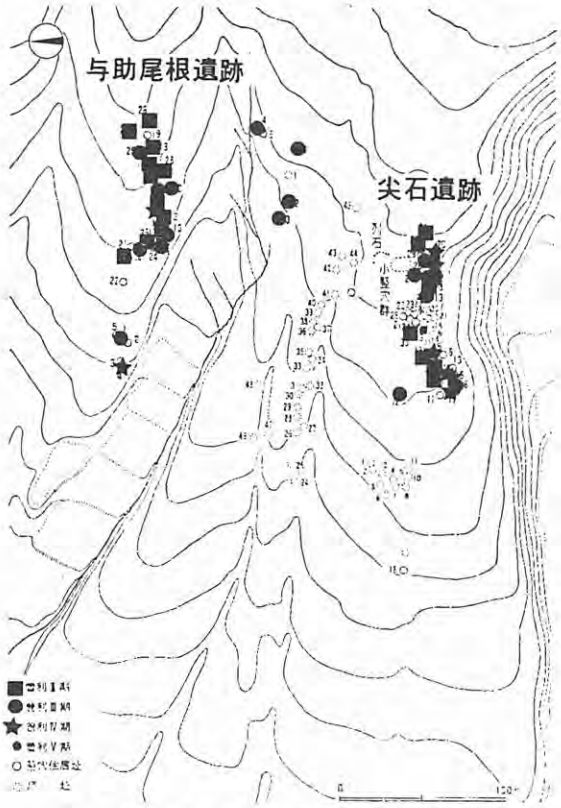


図５　尖石遺跡と与助尾根遺跡の集落変遷
（茅野市教育委員会）

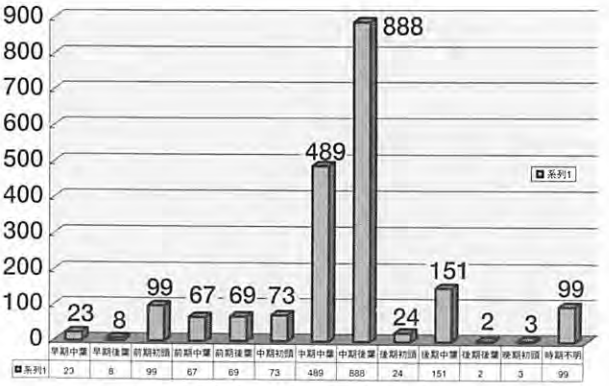


図６　茅野市内の縄文時代竪穴住居跡数
（茅野市教育委員会）

ムラがまた発展するというような形だったようです。こうした集落分析については、『茅野市史』（茅野市 1986）や『原村誌』（原村　1985）など、戸沢先生をはじめとする方がたの諸説がたくさん載っておりますので、また、そういうものをみていただきたいと思います。

樋口　図６をみていただきますと、さきほど柳澤さんもいいましたように、縄文時代中期後葉、つまり初めて聖石で集落が生まれてくる時期から、長野県の遺跡が、これは諏訪地域だけじゃなく、全域にわたってものすごく増える時期なんですね。だから、そういう時にこの台地の住民が長峯遺跡から聖石遺跡のほうへ移る。尖石から与助尾根に移る。人口が増大しまして、分家だとか独立した核家族ですかね、そういう風にしてみんなが集落から離れて、つぎの新しい集落をつくる時代になっていったんですね。そして、さきほどからいいますように、「縄文王国」だとか、「井戸尻文化」といわれる素晴らしい縄文中期文化の、最高の時期に達してくるのですが、じつは、その時期はまもなく終わる。

今度は、その中期が終焉に向かっていくに従って、遺跡がなくなってしまうのかと。そうではなくて、じつはこの茅野市では典型的な集落の変遷がわかるところがあるわけです。小池さんにちょっと中期から後期への集落が、どのようになっていくかということを説明してもらいます。

小池　図７は縄文時代中期の遺跡だけを取り上げたわけではなくて、別田沢周辺でみつかった縄文時代すべての遺跡を示したものです。聖石遺跡と長峯遺跡、それと別田沢遺跡。その南側にも遺跡が点在しております。

広井出遺跡は、前期前半くらいにほぼ限定される遺跡です。

続く前期の終わりころから中期の初めくらいの時期、

図７　聖石遺跡、長峯遺跡周辺の縄文時代遺跡（茅野市教育委員会）

ちょうど長峯遺跡でムラがつくられ始めるころは、北山菖蒲沢（しょうぶさわ）Ａ遺跡とＢ遺跡というのがあります。かと思えば、穴が２つ３つくらいの遺跡がある。町道下（ちょうどうした）遺跡は中期中ごろなんですが、家が１軒しかみつかっていない。そういう遺跡と同じ時期に、それと並存する形で長峯遺跡がある。

これをみて、非常におもしろいなと思うのは、なぜ、こういう台地に前期前半の人たちが住まなかったのかという点です。それぞれの時期の人たちの経営戦略というか、ここの場所に魅力があったからこそ、前期前半の人たちは家をつくっていたわけですから、もしこちらの台地にも魅力があれば、ムラをつくっていたと思います。

写真10　茅野市中ツ原遺跡出土の仮面の女神
（茅野市尖石縄文考古館）

それぞれの時期に、ある程度連携するムラやしないムラ、つぎの時期へ継続するムラと、ある一時期に限定的に住むムラといった姿は、聖石遺跡、長峯遺跡の住居跡の動きに通じるようなことかなというふうに思っております。

聖石遺跡、長峯遺跡では、台地の平坦面、台地の高いところにムラをつくっていたわけなんですけれども、後期―気候がだんだん寒冷化してくるといわれておりますが―になりますと、斜面からだんだんと別田沢（べったざわ）の低地に向かって下りたところに竪穴（たてあな）住居がつくられていくというようなことが、近年の発掘調査でわかってきております。

「仮面土偶（とぐう）」の時期のことに触れておきますけれども、かつて八ヶ岳西南麓では縄文後期以降、遺跡数が減るものですから、それに比例して、人口も減ってきたのではないかと。もっと誇張していえば「無人の野原と化してしまった」とまでいわれたことがあるのです。たしかに、仮面土偶がつくられるちょっと前の時期―中期と後期のちょうどあいだくらいのころ―は遺跡数が激減するんです。ただ、仮面土偶の時期になりますと、ここ10数年の調査の結果、再び遺跡数が増加してくるというこ

とがわかってきております。しかしながら、八ヶ岳西南麓では仮面土偶の時期をもって遺跡がほとんど見当たらなくなっていまして、その行き先がどこであるかというのが、私たちのひとつの関心事になっているわけです。

茅野市内では仮面土偶がつくられた時期以降の人たちが住んだ痕跡が、霧ヶ峰南麓の駒形遺跡ですとか、一ノ瀬・芝ノ木遺跡、棚畑遺跡でみつかっております。また、伊那谷から杖突峠を越えて諏訪への下り口にあたる西山山系に仮面土偶以降の新しい時期の縄文遺跡が点在していることがわかってきております。単純な話ではないと思うのですが、八ヶ岳西南麓から霧ケ峰南麓あるいは西山山系に移り住むといったように、縄文人は動いているのだろうと思います。

樋口　いずれにしても後・晩期の遺跡数はガクンと少なくなりますね。これだけはまちがいない。あれだけ栄えた縄文中期の王国が、後・晩期になりますと少なくなってきちゃうんですよね。仮面土偶のような素晴らしいものを残す時期も、そのなかに含まれているのですが。

こうやってみてきますと、縄文中期の集落というのはいろいろな課題を内部に抱え込んでいるんだということがわかったのではないかと思うのです。

寺内さんどうですか。このふたつの集落の関係は、どうだったと思いますか。たぶん、皆さんが一番聞きたいのではないかと思うんですよ。

寺内　わからないことが多くて一番いやな質問ですね(苦笑)。整理作業のあいだも、どうにかしてこの2つの遺跡の関係を解き明かす手がかりがないか、という風に探っていたのですが、どうしても考古学の世界ですと実証的といいますか、証拠がないとあまりいえないというところがありますから。

ふたつの遺跡は非常に近い距離にありますし、柳澤さんから話がありましたように、ふたつがピッタリと重なる大きさの環状集落だったわけですし、しかも遺跡と遺跡とを結ぶ狭い範囲で茅野市教育委員会が貯蔵穴を発見したという状況を考え合わせれば、ふたつの集落が排他的な関係にあったとはいえないと思うのです。

また、ふたつの集落を探る点としては磨製石斧の接合関係があったわけですが、長峯遺跡の集落が断絶して無人のムラになってしまって、聖石の住人が廃絶した長峯ムラへ行って落ちている石を拾ったというよりも、両方のムラが並存しながら、使わなくなった石のやり取りをやっていたのではないかという風に想像しています。

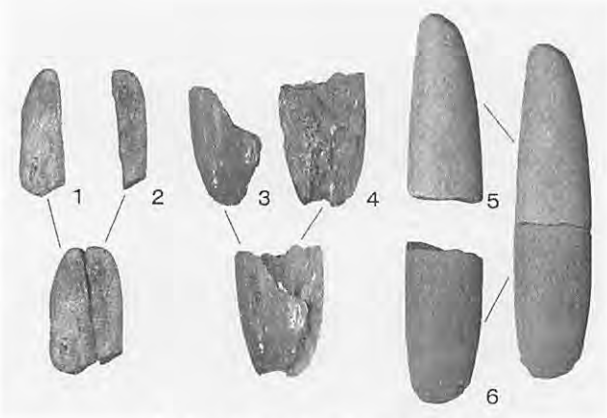


写真11　磨製石斧の接合関係

樋口　「考古学者、みてきたようなウソをつき」といわれていますので(笑)、もう少しウソをついてもいいと思うのですが。こういう問題について、「縄文のビーナス」を掘り、いままた「仮面の女神」を掘って、ツキについた男(笑)、守矢さんいかがでしょうか。

守矢　聖石遺跡、長峯遺跡の資料をいろいろ見させていただいて、何がわかったかということをちょっとお話させていただきます。

まず第1に、聖石遺跡、長峯遺跡ともに中期後半期の環状集落をもっているということがわかってきた。そして、お互いにお墓の中にヒスイをもつものがいくつか出ている。2番目として、後期になると斜面に住んで、敷石住居または石をいっぱい使った遺構をもつようになるということ。さらに3番目ですが、聖石、長峯の集落のあいだに大きな土坑があったこと。

これらを総じてみますと、聖石、長峯のふたつの集落を管理しながら並存していた。ちょっと難しい言葉になってしまうのですが、社会を総括する人間の存在があったのではないかと思います。

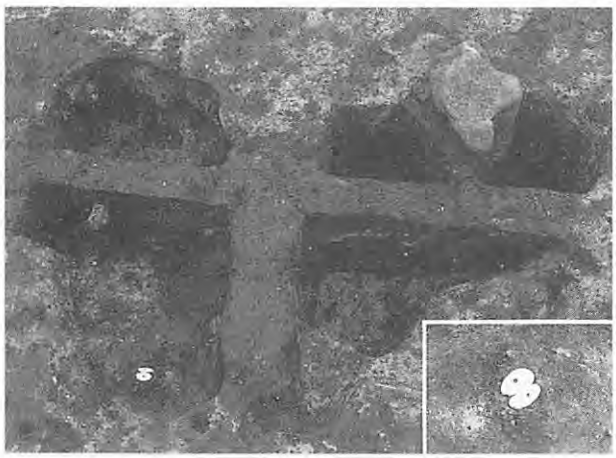


写真12　聖石遺跡の土坑から出土したヒスイ

写真13　長峯遺跡から出土した阿玉台式土器

縄文中期の八ヶ岳周辺のムラが後期になってくると衰退してしまいますが、それが消えずに残った原因も、結局、集団を統括していくだけの力をもつ人間がそこに存在していたために、継続的につながったのではないかと思います。

■聖石遺跡、長峯遺跡と遠隔地との交流

樋口　今度は、話題の３番目として、遠隔地との交流について考えていきたいと思います。

最近、考古学の世界では、自然科学を利用した研究が非常に進みまして、土器だけではなくて、いろいろな遺物の素材に対する研究が広範な分野でおこなわれています。そういう点の一端を皆さんに知っていただきたいと思います。

まずはじめに、さきほどから映し出している写真13の土器につきまして、この土器を専門にして、学生時代から千葉県の方で発掘したり、研究したりしてきた寺内さん、要点をやさしい言葉で説明していただければと思います。

寺内　関東地方の「阿玉台式土器」といいます。特徴的なのは把手です。扇の形をしているため、「扇状把手」といわれています。このような把手をつけた土器は中部高地にはほとんどありません。中部高地の土器ですと、さきほどの有孔鍔付土器のように、非常にたくさん装飾を施すのですけれども、「阿玉台式土器」はどちらかというと文様をシンプルにまとめています。

写真の土器は、昭和34（1959）年に出土したと書いてありますが、宮坂英式先生が掘られたときに出た土器です。さきほど柳澤さんの話にもありましたように、考古学の概説書ですとか、縄文土器の美術書には必ず「遠くから運ばれてきた土器」と紹介されているものです。人によっては「なかに貝を入れて運んできたのではないか」と説明されてきた土器です。今回の長峯遺跡の調査では、この土器と、パッと見にはほとんど変わらないようなスタイルの土器が、１個体ほぼ完形で出てきております。

長峯遺跡からは土器の破片が全部で10万点出ています。私はシツコイ性格なものですから（笑）、10万点の土器の破片を全部みました。10万点のなかで、阿玉台式土器の破片はたったの７点です。10万点中７点あって、それとこの１個体が出てきたということですので、割合としては非常に少ないわけです。ですから、地元で真似をしてつくったのではなくて、やはり阿玉台式土器の本場である関東地方でつくられたものであると考えられるわけです。

関東の方へ持っていっても、これだけ素晴らしい土器というのはなかなか出ないんです。もっと下手くそな土器が多いんです。こういった素晴らしい、つくりが非常に上手で、しかも完形の土器が長峯遺跡に２点だけ入ってくるというのは、なかにものを詰めて持ってきたというよりは、この土器自体が当時貴重なものだったということではないかと考えております。おそらく、運ぶ人も受け取る側も、これは関東地方の素晴らしい土器だとわかっていたんだろうなと思います。

樋口　目方はどのくらいありますか。われわれが持ってどうですか？

寺内　有孔鍔付土器よりも大きいくらいですので、ひと抱えでようやく持ち上げられる大きさですね。

樋口　背負うにしても、たいへんですよね？

寺内　たいへんです。非常に壊れやすい把手のところを割らないように、長峯までの山道を通り、川を渡って運んでくるには、よっぽどしっかり梱包しないとだめだと思いますけど。

樋口　そうですね。関東の海の干し貝や何かをこのなかに入れたり、あるいは塩を入れたりしてこれを担いでくるとすると、もっとたいへんだったでしょうね。

守矢さんどうですか？茅野市の周辺では、こういう遠隔地の土器というのは結構出ているんでしょうか？

守矢　そうですね。いま、関東のお話が出たわけなんですけれども、私がみた限りで一番遠いところは瀬戸内海あたりの土器ですね。「船元式」という土器なんですけれども。たしか、破片ですけれども、長峯遺跡でも出ていますよね。

樋口　「船元式」という土器は、わりと小さな壺みたいな、本当に手の平に入るくらいの大きさの土器ですね。

守矢　そうですね、ちょうど持ち運びに便利な大きさで、籠に入ってちょうどいいくらいです。

樋口　じつはいま、土器の胎土分析といいまして、土器をつくった粘土を分析しまして、どこで産出した粘土を使っているのかということが研究されているんですが、寺内さん、ちょっと簡単に説明してくれますか？

寺内　展示室には、北陸地方の土器を真似してつくった土器と、さきほどの阿玉台式土器（写真13左）の胎土分析結果をパネルで展示してあります。

胎土分析にはやり方がふた通りあります。ひとつは、粘土自体に蛍光X線を照射してどんな元素が含まれているかを測る方法と、砂などの混和材の成分をみて、どこの山砂か、あるいは川砂かと調べる方法です。

今回は蛍光X線をあてて調べてみたところ、おもしろい結果が得られました（図8）。長峯遺跡の阿玉台式土器（■）の粘土については、地元の粘土（▲）とはかなりかけ離れた値が出ています。ただしですね、阿玉台式土器の本場であります利根川の下流域、霞ヶ浦沿岸の粘土ともちょっと違うということですので、関東地方の中でも長野県寄りの場所で作られた土器が運ばれたのだろうというのがわかっております。

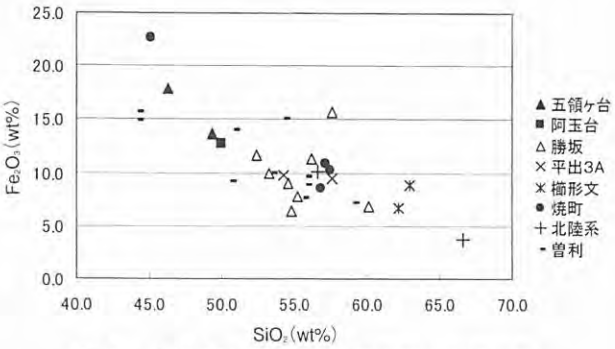


図8　長峯遺跡出土縄文土器の胎土分析結果（Si-Fe の相関）

樋口　写真14に異系統の土器が出ていますので、これをちょっと説明してください。

寺内　このなかに異系統土器がいくつか入っているんですけど、1番がさきほどの関東の土器ですね。船元式土器は破片ですので載っていませんが、2番の有孔鍔付土

写真14　長峯遺跡出土のおもな土器・土製品

器は、この写真では見づらいんですけれど、北陸地方の模様をよく取り入れてあります。もっとも、土器をつくったところは長野県かもしれません。

3番の土器もちょっと見づらいんですけれど、これは、北信から新潟中越、このあいだ地震があった中越地方にある土器ですね。それから4番の土器が千曲川の流域に多い「焼町」という土器です。伊那谷の方に行きますと5番のタイプの土器がどちらかというと多い。

それぞれの特徴についての細かな説明は省かせていただきますけれど、こんな感じで、各地の土器が長峯遺跡へ入ってきているというのがわかってきています。

樋口　異系統の土器は、地元の土器とくらべて、どの程度の割合で入ってきているんですか？

寺内　図9でおわかりのとおり、中期中葉の場合、在地系の「勝坂式土器」と呼ばれているものがほとんどを占めています。多少、住居によって差はありますけれども、「焼町」と書かれている土器、千曲川流域の上田・佐久地方の土器が、勝坂式土器のつぎに多い。一番少ないのは、伊那谷から諏訪あたりの土器、「平出Ⅲ類A」といわれている土器です。

樋口　図9の左側についている番号が住居跡の番号です。ですから、一番上の214号住居跡では、地元の土器が多くて、佐久の土器が少しあって、そういう風にみていただければと思います。

遠くの方から運んでくるものは土器だけじゃないんですね。つぎに、土器以外で遠隔地のことを考える資料として、ヒスイの問題があるかと思うのですが。それについていかがでしょうか？

柳澤　聖石遺跡、長峯遺跡から出てきているものはすべて加工が施されて、しかもかなり完成度が高いものがもたらされているという印象があります。

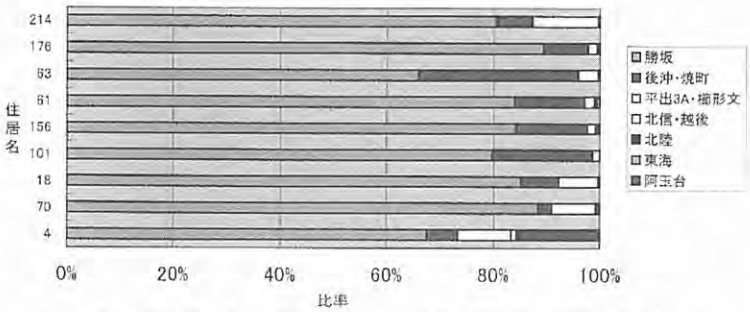


図9　長峯遺跡主要竪穴住居跡出土土器の系統別組成比率

ヒスイの場合、いまでも有名な産地、糸魚川の方に珠を製作した遺跡がございます。どうも、日本海側のそういった産地で製品となって、いまでいえば塩の道、もしかしたらヒスイロードみたいなものが縄文時代にあって、そこを通ってヒスイの珠が運ばれたのでしょう。

ヒスイの珠がどのように利用されたか、はっきりと復元はできませんけれども、ペンダントとして下げられていたのだと思います。縄文人たちはそれをとても大切にして、最後は捨てるのではなく、持ち主と一緒にお墓に納めていました。お墓の主はいったいどんな人かなあ、というのは想像を越えませんけれども、かなり選ばれた人なんじゃないかと思われます。いずれにしても、非常に大切な宝物だと思います。

樋口　ヒスイを一番掘りあてているのは小池さんじゃないかな（笑）。どうですか？ヒスイについて。

小池　遠隔地との関係ということで、ヒスイが話題にあがっているんですけれども、ヒスイと同じようにコハクのペンダントも、茅野市を含む諏訪盆地に多いですね。茅野市は長野県下でももっとも多くヒスイやコハクが出土している地域だと思うんです。それだけ遺跡を掘っているということだと思うのですが。なぜか、私が担当する遺跡では、多くのヒスイやコハクの珠が出土しています。ちなみに土偶は、こちらにいる守矢さんが当たり屋だといわれていますけれども（笑）。

私が知る限りですね、茅野市の10数遺跡から28点以上は出ています。コハクは7点出土しています。茅野市教育委員会では産地分析を積極的にやっていないため、どこで産出した石なのか特定はできないんですけれども。

写真15は立石遺跡のヒスイです。5点出ています。これを糸魚川でヒスイの研究されている方にみていただいたところ、珠の作り方が糸魚川周辺で出土する珠と非常に似ているので、あちらで製作されたものと判断してよかろうということを教えていただいてます。

柳澤さんからもお話がありましたけれども、こうした珠は墓穴から出土する例が非常に多い。おそらく9割方が副葬品と考えられています。お墓に入れられるということは、お墓に入れて「おしまい」ということですよね。そこがまたヒスイのもっている意義を考えるのに非常にだいじなことだと思います。

出土する遺跡にも特徴があります。どのような遺跡でも出るというものではないという

写真15　立石遺跡出土のヒスイ大珠

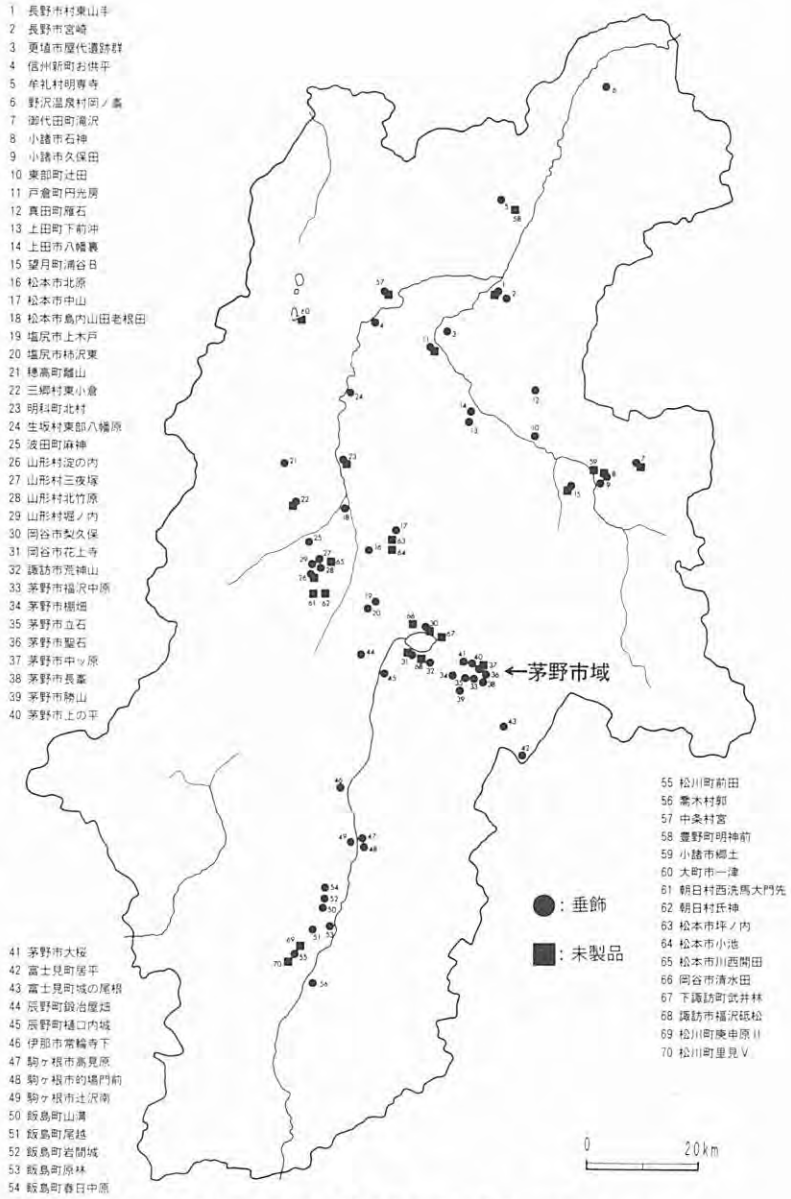


図10　長野県内のヒスイ製品出土遺跡分布（和田2002に加筆）

ことが、近年の発掘調査でわかっております。中期後葉の拠点集落、環状集落のお墓から出るということです。ただ、なかにはムラの形がわからない遺跡からヒスイの珠が出る場合があるんです。たとえば市道のタイル工事のために、遺跡のごく一部を掘ったところ、ヒスイをもっているお墓っぽい穴が出たんですね。ごく一部の調査に終わったために、集落の性格を解明するのは難しいわけですが、ヒスイの珠が環状集落のような拠点的なムラのお墓から出るというような例が多いことから類推すれば、この遺跡も地域の拠点となるような遺跡なんじゃあないかと思われるわけです。

樋口　いまの小池さんの発言は、重大な問題を提起しているわけでして、じつは松本平でも伊那谷でもそういう遺跡があるわけです。しかし、そういった集落の形態が環状であるかどうかということは、だれも確認してなかったわけですが、松本あたりでヒスイが3個も5個も出た土坑（とこう）をもった遺跡は、地域の拠点的な遺跡だったのかということを、気づかされたわけです。

孔（あな）を空けるのはたいへんなんですよね。この孔を空ける問題なども、皆さん不思議だろうと思うんですけれども。それはちょっとやっている時間がないので、また、自分で勉強をしていただきたいと思います。

原産地はまちがいなく糸魚川（いといがわ）でしょう。日本全国から出ているものを分析してますが、ほとんど糸魚川ですね。新潟県から松本、諏訪を通って関東へ行く、いわゆるヒスイロードというお話がありましたが、ヒスイの珠（たま）がたくさん出るところは皆さんご存知ですか？じつは日本海沿岸の秋田、青森なんですね。そして北海道なんです。そういった地域から糸魚川産のヒスイの珠がたくさん出るということはですね、やはり舟ですね。陸上を行くよりも、船で行くというような問題が出てくるんじゃないかと思うんです。

今度は、ヒスイをちょっと離れまして、えっ、本当にそんなところから舟で運ばれてきたの？というような点でですね、黒曜石の問題に入りたいと思います。

柳澤　遺跡から出土した黒曜石の原産地を調べるというのも、私どものような考古学の手法だけではなかなかわ

判別群＼遺跡	聖石		長峯	
	点数	組成	点数	組成
和田芙蓉ライト群			8	0.56
和田鷹山群	17	2.57	32	2.23
和田小深沢群	2	0.3	9	0.63
和田土屋橋北群	3	0.45	13	0.91
和田土屋橋西群	3	0.45	2	0.14
和田土屋橋南群	1	0.15	1	0.07
和田ブドウ沢群			1	0.07
和田高松沢群			3	0.21
★諏訪星ヶ台群	599	90.48	1172	81.79
蓼科冷山群	33	4.98	187	13.05
蓼科双子山群	1	0.15	3	0.21
蓼科擂鉢山群	3	0.45		
★神津島恩馳島群			2	0.14
合計	662	100	1433	100
推定不可	5		4	
測定不可	1		21	
非黒曜石			1	
欠番			1	

図11　聖石遺跡　長峯遺跡出土黒曜石の産地組成
（分析：沼津高専望月明彦）

からないんです。静岡県の沼津高等工業専門学校の望月明彦先生のところへ、聖石遺跡、長峯遺跡から出土した黒曜石を持っていきまして、分析をしていただきました。先生はいままで原産地の黒曜石をたくさん分析されているものですから、今回の分析結果と、原産地の数値とをつき合わせて、産地同定をしてくれたわけです。

その結果を遺跡・産地ごとにまとめたのが図11の組成表です。聖石遺跡、長峯遺跡から出土した黒曜石の多くは、諏訪の星ケ台群産であることがわかります。ついで、蓼科の冷山群となります。群を抜いて星ケ台産が多いですね。

産地周辺をあらわした図12の地図をみますと、諏訪の「星ヶ台」というのは駒形遺跡の上のあたりになります。池のくるみ湿原の上です。聖石遺跡、長峯遺跡からの距離では、どちらかといいますと冷山の方が近いのですが、分析してみると星ケ台の方が多いということがわかりました。

図11にもどりますと、神津島恩馳島群産の黒曜石が2点だけみつかりました。この2点はいずれも長峯遺跡出土の石鏃です。今回、私どもが分析をお願いした試料は、両遺跡から多量に出土した黒曜石から、住居跡から出土したものを中心に、石器の原料である原石や石核、製品である石鏃や石匙を2,000点ほど選択したものです。そのうちのたった2点、いずれも製品である黒曜石が遠く神津島産であったという、びっくりするような成果です。

樋口　茅野市教育委員会の分析でも、そういう遠くの方の黒曜石が来ているという結果は出ていますか？

小池　黒曜石の分析もヒスイ同様あまりやってないものですから、情報としては乏しいです。

樋口　じつは先々週の土曜日（平成17年7月16日）、塩尻市平出考古博物館の『土曜考古学サロン』で、御代田町縄文ミュージアムの堤隆さんから旧石器時代の細石器の話を聞いたんですけど、やはりこれが問題になりまして、旧石器の石器のなかにも神津島産があるということです。「神津島」というのは伊豆七島のなかにありますからね。あそこで出る黒曜石が、なぜ、信州のこんな山の中にあるのか。当然、交易という問題が大きなテーマになってくるんじゃないかと思います。

ちょっと言い忘れましたが、小池さんがコハクの話をしましたですね。コハクの原産地というのは日本でも限られておりまして、銚子の犬吠崎がありますね。それから、最大の産地は岩手県の久慈市にあるわけですが、どういうわけか、茅野市だとか岡谷市というのはコハクが多く出土するんですね。ですから、そういう貴重

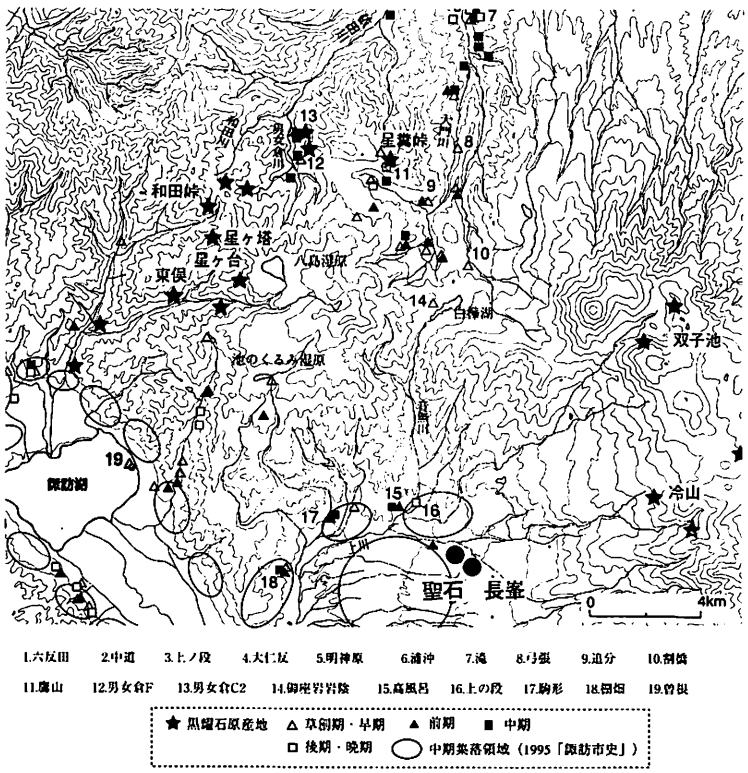


図12　聖石遺跡、長峯遺跡周辺の黒曜石原産地遺跡
（大竹・中島1999に加筆）

なですね、縄文たちにとって非常に珍しいヒスイだとかコハクがかなり遠くから運ばれて来ているということがわかるわけです。ところが、自分たちの生活にとって重要な狩りの道具である石鏃や何かをつくる黒曜石は、長野県にはいくらでもあるわけですよね。それにもかかわらず、ここへ神津島の黒曜石が入っていることをどういう風に解釈したらいいのか。

むかしは、黒曜石なんてみな一緒だろうと思っていたわけなんですが、現代では、科学が進んできたために、分析すると長野県から出土する黒曜石のなかにも、神津島産やら、箱根産やら、あるいは那須産もあるといった具合に、驚くべき分析結果が出てきているわけです。これからは、自然科学方面からのアプローチというのを大いに期待したいと思うわけでございます。

■まとめと講評

樋口　今日の縄文トークでは、このほかにもいろいろな課題を用意していたのですが、そろそろ時間もせまってきました。

じつは今日、皆さんご存知の「縄文王国」とか「井戸尻文化」というキャッチフレーズを、学会に投げかけた戸沢先生が会場にお見えになっています。ここで、戸沢先生に、今日のトークに関することで、縄文中期文化に対する戸沢先生の思いを、「思い」といっては変ですが、考え方をお話いただきたいと思います。戸沢先生よろしくお願いします。

戸沢充則　きのうは、飯田市の竹佐中原遺跡でたいへんなものが出ているということで、埋文センターの方がたに呼ばれてみせていただいてきました。今日は東京への帰り道で、こういうイベントがあるから顔を出せといわれまして、「じゃあ、皆さんの話を聞くだけ聞こうか」ということで参加させていただいたわけです。

信州の縄文文化については、細かいことを言いはじめると1時間以上必要なほど、しゃべりたいことがたくさんあるわけです。いや、決して文句じゃございません。いろいろな研究テーマがあるということです。今日は感想だけいわせていただきます。

第1番目として、今日はこの席に3時間近く座っていて非常に感銘を受けました。どういうことかといいますと、埋文センターで、こういう形で市民の皆さんに集まっていただいて調査の結果を報告する。それも、ややこしい、学会でよくやるような、わけのわからない小難

写真16　講評を述べる戸沢充則先生

しい話ではなくて、皆さんがわかりやすいように問題点をきちんと明らかにした報告でした。僕はいつも人に文句ばかりいってますけど、(「縄文トーク」の前に) 遺跡発表をした3人は、本当にわかりやすく、問題を、焦点をつかんだ報告をしてくれたと思います。僕も茅野市には関係していますが、駒形遺跡とか長峯遺跡とかがこんな凄い遺跡だったのかと、改めてびっくりするくらいの感動を受けました。それがひとつです。

第2にですね、樋口先生の世界を若干伝授されたようですけど、八ヶ岳山麓の縄文文化をめぐる問題について、短い時間で語り尽くせなかったとは思うのですが、非常に重要な問題を提起されました。今日提起された問題はですね、ただひとり八ヶ岳西南麓の縄文文化という地域に限定される問題ではなくて、日本の考古学、縄文文化全体につながる大きな問題だったと思います。環状集落の問題にしても、黒曜石やヒスイの交流の問題にしても、いま、日本の考古学で一番大きな課題になっていることだと思います。ところが、長野県のようにきちっとした資料をもった研究がなかなか進められず、空理空論に終わっているところがある。しかし、今日の話し合いはですね、遺跡のなかでこういう風に問題を絞って、こういう風にみていけば、何か凄いことがわかるのではないか、ということを本当に実感させられるトークだったと思います。司会をされた樋口先生に敬意を表しますし、ここにお集まりの皆さんも本当にいい話を聞けたのではないかと思います。

ひとつ、これは僕なりのちょっと助言をいたします。

たまたま、尖石縄文考古館がオープン5周年というんで、僕に講演をしろとテーマを与えられました。「考古地域史の試み」ということです。考古地域史云々について、ここで再びお話しする時間はございませんけれど、要するに、今日皆さんが語り合ったようなことをで

すね、自分たちが持っている資料できちんと分析を重ね、研究を続けていく。そして皆さんとも話し合うということから、地域の本当の歴史ができあがるのだ。地域の文化財、歴史にそれが生きるのだという話をしたつもりであります。それから1週間後ですけれども、今日はまさにあの時の講演の内容が実践された試みだと思うわけです。今日は、茅野市から小池さんと守矢さんが来てます。おそらく彼らも考えていたんだろう思いますが、先週の講演内容を自分たちの問題として捉えて、お話をしていただいたということで、非常によかったと思います。

話がまとまりませんが、本当にこのような会はですね、埋文センターとか学会とかという垣根を越えて、いつでもどこでも皆で創り上げていけるような雰囲気が信州の考古学に芽生えていったらですね、本当に信州は「縄文王国」どころか「考古学王国」になるだろうという風に信じます。(拍手)

樋口　ちょうど時間になるくらいと思いまして、戸沢先生にふりましたら、時間どおりにやっていただけました。私の最後の挨拶まで戸沢先生のなかに入っているのではないかと思います。本当に戸沢先生、ありがとうございました。

これで終わりにしたいと思いますが、ちょっと一言だけ申し上げておきます。

いま、お話しました戸沢先生のああいうお話。とくに、信州に戸沢先生が旅をして感じたこと。そして信州の考古学に対して戸沢先生がいろいろな思いを込めた書いた本（戸沢　2005）が最近出版されました。下の展示会のところに置いてあります。同じように、尖石（とがりいし）とともに長野県が日本全国に誇る井戸尻（いどじり）で、戸沢先生がやはり講演をなさいました、開館30周年記念。その時のシンポジウムの本（富士見町　2005）も置いてあります。是非ご購読いただければと思います。

余計な話をしまして。今日は私がメモを忘れたために、もれてしまった話題も多かったのではないかと思いますが、できるだけ皆さんにわかりやすくという点に心がけてみました。しかし、たぶん、皆さんのなかには縄文文化に対する謎がますます深まったという方が多いのではないでしょうか？「なんで環状集落になるんだ。」「縄文人はなにをやってたんだ？」「縄文時代の八ヶ岳の気候はどうだ？情景はどうだ？」という。それが、学問へのはじめの一歩なんですね。

どうかご観衆の皆さん。そういうことを自分で空想しながらですね、勉強していっていただいて、これから長野県の考古学がますます発展するように、是非ご協力をお願いしたいと思います。

写真17　伊那文化会館小ホールでの縄文トーク

4人の発表者の皆さんありがとうございました。

つたない司会でうまくまとまられませんが、これで縄文トークを閉じたいと思います。(拍手)

主催者　樋口先生、パネラーの4人の皆さんありがとうございました。

これでピタッと終わればいいんですけれど、そうはいっても欲求不満がどうしても残っている、これだけは聞かなければ、今夜眠れないという方がいらっしゃると困りますので、何かご質問があればお願いします。

聴講者　今日は、いいお話を聞かせていただきましてありがとうございました。

トークのなかで、八ヶ岳山麓の縄文文化、これは非常に大きな文化で縄文文化のなかで頂点に立つ「王国」といわれているのですが、その実態は何かというのが、よくわかったようなわからないような感じなのです。

ようするに、中国などへ行きますと「黄河（こうが）文化」あるいは「長江（ちょうこう）文化」というように、さまざまな文化があって、それが発展したり、合成して、ひとつの黄金時代をすることになっているのですが、日本ではどうなのかと。縄文文化はどこで生まれて、日本の中でどういう形で変遷して、八ヶ岳山麓あるいは山梨を含めた中部高地の文化ができたのか。それがまた、どういう形でどこへ移っていったのかと。ここら辺がちっともわからないので、是非教えていただきたいというところです。

樋口　本当は、こういう問題については、戸沢先生の方がいいかと思いますが、司会をやっております私の方で

簡単に申し上げます。

縄文人が日本人の起源であるということは、DNAをはじめとする遺伝子の研究や人骨の計測その他からもまちがいないことは、おわかりだろうと思います。その縄文文化がどこからきたのかという点について、昔は南方からという説もありましたが、最近ではどうも西から来たのではないかという説に傾いているそうです。学説というのはどんどん変わっていくのではないかと思います。しかし、日本人は、旧石器時代を経て、縄文時代そして弥生時代になりますと、朝鮮・中国から多量の人びとが移ってきて、現在の日本人があるというところまではおわかりだろうと思うのですが。

じゃあ、この八ヶ岳の縄文文化というのはどういうことかといいますと、縄文文化のなかで最高に栄えた文化であるということは理解していただきたい。八ヶ岳だけでなくて、松本平、伊那谷、そして甲州、関東地方の台地一帯にですね、いまから4,500年から5,000年にかけて、最高の文化を生み出したのではないか。

ところで、最高の文化というのは何をもっていうのか。まず、人口が増えたということ。遺跡がもの凄くたくさんあるわけです。

皆さんは、青森県の三内丸山遺跡があるじゃないかとお思いになるかと思います。三内丸山は一時期「縄文都市」とまでいわれたことがありました。ところがあの遺跡は、縄文文化のなかでも特殊な遺跡なんですね。三内丸山遺跡の周囲の遺跡分布をみると、八ヶ岳山麓の遺跡分布に比べて、案外、遺跡数が少ないわけです。全然ありません。この八ヶ岳から伊那谷一帯の遺跡密度は、もの凄く高いわけです。

それにいかがですか？この土器をみて。井戸尻考古館や尖石縄文考古館へ行って、縄文土器をご覧になった方も多いと思いますが、ああいう素晴らしい土器を生み出したのは、世界の歴史上でも縄文文化だけだと私は理解しております。たとえば、中国の彩陶があるじゃないかといいますが、彩陶なんてこんなに小さいもので、ちょっと模様が描いてあるだけですよ。たいしたものではない。

写真18　速報展　長野県の遺跡発掘2004

そして、いいですか。縄文時代の人たちがこんな素晴らしい土器をつくり得たということを考えてください。貧乏ではつくれませんよね。明日、食うものに困るような人たちが、こんな素晴らしい土器をつくれると思いますか。つくれませんね。縄文時代の人たちは、きっと豊かな自然に囲まれた中で、その豊かな自然の恵みに感謝しながら暮らした人たちだからこそ、こういう素晴らしい土器を作り得たのだと。それが、戸沢先生がいうところの「縄文王国」であり、「井戸尻文化」をつくったのではないかと思うのです。

僕はいつもいうのですが、縄文時代の1万年間というものは、日本の歴史のなかで唯一戦争のなかった時代だったということです。細かな話をしている時間はありませんけれど、是非とも、皆さんの頭に入れておいていただきたいのは「戦争のなかった縄文時代」ということです。國學院大学の小林達雄氏は、縄文時代にも戦争があったといっていますが、それはありません（笑）。戦争が始まるのは弥生時代からです。これから僕らは、絶対に戦争になるような時代を築いてはいけないと、皆さんに縄文時代を理想としていただきたいと思うわけです。

ひとりでしゃべってしまいまして、すみません。終わりにしたいと思います。（拍手）

主催者　ありがとうございました。それでは、これで縄文トークをしめさせていただきたいと思います。もう一度壇上にいる司会の樋口先生、それからパネラーの皆さんに拍手をお願いできますでしょうか。（拍手）

■引用文献

長野県『長野県史　考古資料編』1981
樋口昇一・桐原健『日本の古代遺跡50　長野』保育社1996
宮坂英弐「長野県茅野市長峯遺跡」『日本考古学年報12』1964
茅野市『茅野市史　上巻』1986
原村『原村誌』上巻　1985
戸沢充則『歴史遺産を未来へ残す』新泉社　2005
富士見町教育委員会『井戸尻考古館建館三十周年記念講演録集』　2005
長野県埋蔵文化財センター『聖石遺跡　長峯遺跡』　2005
和田和哉「縄文時代のヒスイ」『長野県考古学会誌98』2002
大竹幸恵・中島透ほか　1999『鷹山遺跡群Ⅲ』

【付編後記】

この付編は、平成17年7月30日、長野県伊那文化会館で開催した縄文トーク『八ヶ岳山麓の縄文文化』の録音記録です。トークの司会をお引き受けいただいた樋口昇一先生は、平成18年1月12日早暁、中信松本病院において急逝されました。享年73歳。

先生は、埋蔵文化財センターの前身、中央道遺跡調査会在任中から埋文センター構想の策定に参画され、昭和57年の創立時には調査部長として組織体制づくりにご尽力されました。昭和60年からは、調査第1部長として松塩筑の発掘現場の最前線で陣頭指揮にあたられ、長野調査事務所の立ち上げにも奔走していただきました。平成4年、事務局参事として三たび奉職された先生は、総勢100名余の大所帯に膨れあがった埋文センターの柱石として、常に的確な業務運営にあたられました。さらに、ご退職後も長野県遺跡調査指導委員として大所高所からご指導いただいたのをはじめ、長野県文化財保護審議会委員としても埋文センターの調査で出土した屋代木簡や下茂内遺跡出土石器などの重要遺物を再調査してこられました。

先生のお仕事あるいはご指導の中で終始一貫していたのは、常に市民の皆さまの視点に立って埋蔵文化財を語る姿勢でした。この『埋蔵文化財センター年報』や埋文センターが発刊する『発掘調査報告書』、『埋文ニュース』の雛形を作られたのは先生で、これら出版物の編集にはいつも細心の注意を払っていました。遺跡の現地説明会はもとより、展覧会や講座・講演会、学習会を通じた調査成果の公開については、自ら率先して取り組まれると共に、常に職員を鼓舞してこられました。

今回の『縄文トーク』は、そうした先生のご教示がようやく実を結んだ企画となり、その司会者としては樋口先生をおいて他にないというのが職員一同の声でもありました。しかし、残念ながらこの企画が先生と埋文センターとを結ぶ最期の仕事となってしまいました。本来ならば、この記録も先生に目を通していただき、市民の皆さまに対して恥ずかしくない出版物として発行しなければならなかったわけですが、それも叶わなくなりました。

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

長野県埋蔵文化財センターは、日頃、先生から頂戴したご指導を胸に、これからも市民に開かれた埋蔵文化財調査組織として運営していくことをお誓い申し上げます。

長野県埋蔵文化財センター年報22　2005

発 行 日　平成18年３月15日
編集発行　(財)長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒388-8007　長野市篠ノ井布施高田963－4
TEL　026－293－5926
印　　刷　信毎書籍印刷株式会社
〒381-0037　長野市西和田1－30－3
TEL　026－243－2105